



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	聞き書き 北上川河口地域の人と暮らし : 宮城県石巻市北上町に生きる
Author(s)	宮内, 泰介
Relation	聞き書き 北上川河口地域の人と暮らし 一宮城県石巻市北上町に生きる / 北海道大学文学部地域システム科学講座 宮内泰介研究室 編. pp.1-110.
Issue Date	2007-09-01
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/50817">https://hdl.handle.net/2115/50817</a>
Type	report
File Information	kikigaki-kitakamigawa.pdf



聞き書き

# 北上川河口地域の人と暮らし

宮城県石巻市北上町に生きる



撮影：菊池永 1970年代後半撮影







聞き書き 北上川河口地域の人と暮らし……………〈目次〉

谷地の章……………9

「田んぼをおこすのにえらい力がいったもんだね」

鈴木民雄さん 10

コラム／北上川の河川改修 18

「16歳のときに運転免許をとり、オート三輪でたくさんヨシを

運んだものです」 佐藤健児さん 23

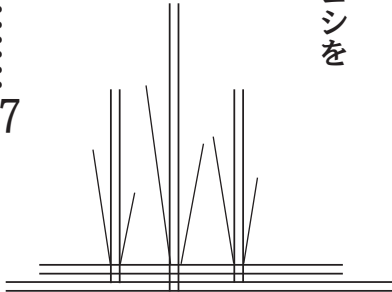
コラム／東北丸 37

コラム／牛馬と朝草刈り 41

水の章……………47

「田んぼ、酪農、ヨシ刈り、養蚕…とにかく、いろんなことを

してきたの」 千葉信男さん 48



---

コラム／大沼 60  
コラム／皿貝川 66

---

山の章……………77

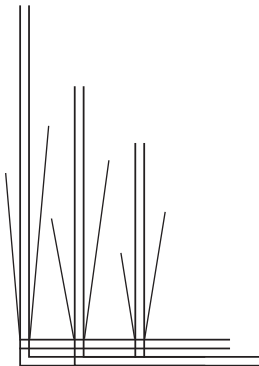
「夜、提灯を点けて粟拾いに行ったものです」佐々木初男さん 78

「最後に炭化するときはもう、一つ、二つ、三つ……って」

館岡栄志さん 88

「谷多丸開拓で13年間山にいました」武山武志さん 98

あとがき  
108





谷<sup>や</sup>  
地<sup>ち</sup>  
の  
章



鈴木民雄さん

「田んぼをおこすのにえらい力が

いったもんだね」



大正7年（1918）に釜谷崎かまやざきに生まれる。そのころ、釜谷崎は現在の位置にはなく今の北上川の中にあつた。新北上川の開削工事が始まる前である。大正から昭和にかけて行われた北上川下流の大規模な改修工事に伴って大須おほすと釜谷崎は集落全体の移転を余儀なくされた。

## 河川改修

明治43年（1910）と44年の大水害の時、宮城県中田町（現宮城県登米市とめにある）の堤防が切れて、桃生町ものうから河北町かほく（ともに現宮城県石巻市にある）まで水がだーっと流れてここまで真つ直ぐ水が来たという歴史が残っている。その時、この川はダメだということで、この堤防が作られることが計画されたわけさ。

1 詳しくは本書18ページ以下を参照。

## 移転後の生活

田んぼが全部川になって、ヨシが生えているのは私たち先祖の田なんです。昔から田になっているところもあつたけど、今田んぼやっているところは谷地やちになつていた。大正13年（1924）にこつちに来たから。大変だつたよ。谷地はすぐ簡単に田んぼにできたの。でも、収量（収穫量）は悪かつた。特にうちのあたりの（移転する前の）田んぼは、優秀な田んぼだつた。当時は馬で代掻しろかきして田植えして。こつち（移転後の釜谷崎）来たら馬なんか入れない。腰切り（腰まで水に浸かる湿田）でね、沈んでしまう。ほとんど手で開墾した時代続いたんだね。昭和12～13年（1937～1938）から14～15年ごろ、おち働くころまで手でやって。そのころ田んぼをおこすのにえらい力がいったもんだね。そのころやったもんだから力がついた。

## 小作と地主

そのころ、金ある人は谷地買ったんだね。それで、地主になつた人が2、3人おつた。当時の百姓つていうのは自作と小作があつてほとんどが小作だつたのね。釜谷崎の半分が小作で使われる方、半分は地主で使う方。だから、表通りの連中は良かったわけさ。そのころの生産量は今の半分くらいしか穫れなかつた。反あたり5俵（300キログラム）穫れればいいほうだつたから。小作つていうのは、2俵地主に小作料として収めるのね。ところが、この辺の部落は、この堤防の工事が大正の初期から計画されて、終つたのは昭和8年。その工事がずーっと続いておつた。その工事の工夫として働いておつたからなんとかか何とか生活ができておつたんです。

### 2 谷地

川沿いや沼地などの低湿地のこと。現在、旧北上町では北上川沿いの高水敷に広がるヨシ原のことを主に指す。

昭和6年、7年に農民運動があつたんだよ。小作人と地主の戦いだつた。ヒノキップつていう代議士いたんですよ。日野吉夫ひのよしおつていうんだけど。この人当時、小作人側の筵旗むしろ立てて、小作人側さんつて農民運動さした。学校の教員やつていたんだけど辞めてその運動さんり込んだわけ。そして社会党の基礎作つたのはその人なの。だから、当時、社会党の革新系統、地主側は保守系統。保守・革新という時代が続いたわけだ。

## 現在の谷地の生まれ

自分たちの持つた田が買収になつて、田んぼの土トロッコで全部堤防さ運んで、この堤防作つたわけだ。今の谷地やちは、今から1メートルくらい下に地盤があつた。田んぼさ掘つてこの堤防さずーつと作つたもんだから沼ができたわけ。最初の3〜4年はいっぱい沼あつたもんだつた。そこにヒシ4やハスの葉5だとか上流から流れてきて、一時期ヒシがえらくでていた。カバ6も生えてきたりして。カバの利用方法というのは馬の荷鞍にくら、それをカバで編む。10年くらいこの人たち採つて。

そいつが、だんだん高くなつて堤防の根つこの方からヨシ生えてきたもんだ。一水くるとだいたい10センチくらい地盤が高くなる。上流から泥が流れてきて。川というのは「みお」がある。みおつていうのは専門に流れているところ。みおつていうのは決まっているわけだから。堤防にものすごいぶつかった。それで、もたないつていので「わく」を作つた。わくといふのは石入れて、水ぶつかつて流れを調和するために入れた。釜谷にもあるし学校の近くにもあつた。谷地にもわくある。みおがぶつかつて。それで北側の谷地高くなつてきた。だんだん、今のようなヨシが生えるようになってきて、川のヨシになつちまつた。昭和の5〜6年ごろに立派なヨシ谷地になつた。

### 3 日野吉夫

1901年に旧河北町に生まれる。旧河北町で教師をしながら農民運動に参加した。戦後、社会党から衆議院議員を務めた。

### 4 ヒシ

ヒシ科の一年生の水草。 *Tapa japonica*。実はデンプンを多く含み食用となる。

### 5 カバ

ガマのこと。高さ1.5〜2メートルになる多年草。水辺に生える。

## 海苔簀のりす

海苔簀も始まったのは、昭和の博覧会やったの仙台で昭和3年ね。あのころからやったんでないかな。海苔を干す簀を編んでいた時代があった。そのころは、谷地は部落のものになっていた。最初のうちヨシズにしたってというのは、ヨシ生えればかりであんまり伸びもないし、非常に細かったんで。だんだんこういう立派なヨシになったけど、最初のうちは本当に細い柔いヨシだった。それで、ヨシズ加工にしようということになったんです。

契約講<sup>けいやくこう</sup>主体に海苔簀組合作っただんです。海苔簀はみんなしてやったんですね。日決めて、今日は口開け<sup>くちあき</sup>すっからっていうことで1週間くらい刈ったね。土用になるとヨシズに成長すっから口開けは8月20日ごろ。時間決めて8時なら8時から始まる。そうするとだいたいぶ差ついたよ。上手な人は倍くらい刈った。結局競争になっちまうね。そのころになると堅くなるからそれでヨシズに刈って葉を取って乾燥して、これくらい(30センチメートル)に切って乾燥したんです。それから、5尺メ(約150センチメートル)で海苔簀組合で持つてきなさいって。そいつまとめて船積<sup>ふねづみ</sup>んで。気仙沼<sup>けせんぬま</sup>の漁業組合あたりさやっただんです。そいつを更に加工して簀<sup>すたれ</sup>で売った時代もある。十三浜<sup>じゅうさんはま</sup>の人は加工したけども、この人たちは加工しなかった。ちょうど海苔くらいの大きさにして、簀にして売った。戦争行く前はやっていたね。今みたいに海苔を機械乾燥させる時代に入ってしまったって、ヨシズがビニール製品に変わってしまったっていらなくなりました。ヨシズの需要なくなってしまったって。ヨシズはだいたい昭和24〜25年ごろまであったべね。

### 6 海苔簀

真水に溶かした海苔を流し込み乾燥させるための簀。30センチメートル四方ほどの大きさがある。

### 7 契約講

ムラ単位で相互扶助・冠婚葬祭・地域資源管理を行う組織。東北地方で多く見られる。現在は形骸化している地域も多い。詳しくは本書88ページ参照のこと。

### 8 口開け

集落などで共同利用されている山林や漁場などで資源を利用できる期間が始まる日。解禁日。

## 刈敷かりしき

当時ね、うまく作って1反(10アール)5俵だった。今みたいに10俵なんて穫れなかった。堆肥だけ肥料にして。あのころ化学肥料ってないから、今の谷地やち、ヨシおがる(生い茂る)ね。そいつを刈って田んぼさ入れた。肥料代わりに。だいたい5月中ごろになるとずいぶん育つから、刈ってきて丸つて(束ねて)ね。田んぼさ1週間くらい入れると腐ったもんだ。青いの。そいつばら撒いて堆肥代わりに使ったこともあるの。5月の末あたり、5月20日過ぎだね。6月10日くらいだったから田植え。そういうことよそでやってない。こだけ。刈敷きっていったもんだ。契約けいやく講で、刈敷きやる、口開けつからみんなして刈って、1日か2日刈って、田んぼさ入れた。太くてよく伸びたヨシを刈った。昭和6年から7年から10年くらいの3〜4年間だったね。後は、化学肥料出てきたからね。

## 谷地の分け方

堤防は草いっぱい。釜谷崎かまやせき、大須おほすだけが田んぼや屋敷が(河川改修で)買取になったので、釜谷崎、大須には権利があるものとして使っておったわけ。朝早く起きて、草刈りして家畜に、馬にやるっていう時代がだいぶ続いてきたんです。朝3時か4時ごろ起きてきて、馬さ食わせておく。大正から明治時代からそうやって馬を飼っていたわけなんです。その時、草刈り場ないから。そうだね、昭和3〜4年ごろじゃなかったかね。部落むらごとにこんな喧嘩けんかになっちゃって。ここまではオラたちのだ、ここからはおめえらのだ、って申し合わせて騒いだんです。切りがないから、境を決めることになって、その時に鎌持ち出してえらい喧嘩けんかになったんですよ。朝、馬持ってきて草刈るんだから、鎌持かまもちっていて。

権利を欲しがっていたのは、女川<sup>おながわ</sup>、長尾<sup>ながお</sup>、本地<sup>ほんち</sup>。結局、平等に権利を与えるということで、堤防を区画決められてしまった。草刈り場として権利与えろといってきたが、今度はヨシのほうも権利を主張され、結局代表者が話し合いで各部落ごとに分けてやったわけ。ここまですが釜谷崎、ここまですが長尾、ここまですが行人<sup>ぎょうにん</sup>前<sup>まへ</sup>つて。境界には杭打つて。結局は大須、釜谷崎の田んぼなりが買収されたから、その分余計について倍以上の面積を。自分たちの田んぼが潰れたわけだから、ここは俺らの場所じゃないのかという思いは強かったんじゃないか。部落は小さいけれども、その面積は結構広がったんだ。よそは戸数の小さいところは、戸数割みたいにして。多いところには余計につて具合に分けた気がするね。昭和7〜8年ごろだったかね。それからはもめごとはないね。

## 谷地の入札の始まり

そのころ海苔<sup>のり</sup>簀<sup>ず</sup>に利用されていたから、ほとんどヨシに残る分が少なかった。土用に青刈りにしちまつたから。それが海苔の別の乾燥方法取るようになってヨシズがいらなくなつちまつたから、谷地残るようになって今度はヨシズ全部止めて今のヨシの状態になった。建設省（当時は内務省）は、もともとその部落の田んぼだったから、そういう縁故を尊重して、その分は部落させますよ、ただし、料金として3000円から建設省は権利金みたいなのを取つたんだ。そのころは安かつたんだね。契約講で払い下げ受けて、入札で業者に任せた。ヨシズ業者は終戦前昭和15〜16年からあつたんでないかい。佐藤栄助さん（現在の佐藤産業）がヨシ商売始めて。

業者もだんだん増えて、ヨシの価値が終戦後から上がったな。終戦前は、多少利用されたけど、あんまりまあ部落から譲ってもらつて部落の人たちも適当にやつておつた。ところが、だんだん谷地というもの

が利用価値がでてきたもんだから。一番問題は、屋根さ上げるのか、ヨシを加工するのか、壁の下地に使うのか、利用によつて価値が出てきてね。したがって、ヨシの利用がそういう方向にいったもんだから、業者も競争するようになった。葦簾よしずの良いヨシが出るところがどうしても高くなる。だから、業者つていうのは3、4人しかいなかったから話し合いでやる場合もあるし、お互い儲けなきやいけないから無理したつて。ところが、谷地やち代金よちがあまりにも入札で吊り上がってしまった。とてもこんなヨシ刈つても採算合わないから業者も投げってしまった。今では部落も刈る人いなくなったから頼んで刈つてくれつて。

### 小舞こまい

戦争で焼けた後、戦後復興のころは壁と屋根2通りに。壁材が主体だった。屋根さがるのはわずか3割くらいだった。壁材は、小舞こまいつていつて壁塗る前に下地にカヤと竹で編んで。仙台さだいぶ運んだ。仙台に小舞かけ専門、壁塗らないで小舞だけかく（作る）組合があつて、その人たち20人ぐらい職人がいた。いい建物つていつたらみんなその人たちがやつていた。仙台にじゃんじゃん家建つた時ね、3人くらい組になつてね。小舞かいて、竹とヨシでかいたも



この上に壁土をぬり仕上げる。  
ヨシを使った小舞

んだ。それをずっとやって、良いヨシは全部、壁材になったね。

## 屋根

昔は、古川（現宮城県大崎市にある）あたりはみな屋根を藁わらで葺ふいていたから。藁わらとか麦とかは7〜8年持てばいい持ちようで、毎年屋根葺かなきゃならないから、ヨシで葺けとなって、ヨシで葺いたら喜んでね。こいつはいいものだってあそこらの人たちじゃんじゃん葺き替えしたもんだ。じゃんじゃん古川あたりさ運んだもんだよ。

屋根葺きさんは、昔はこの辺でも5、6人いた。古川あたりにもだいぶおったね。ところが、藁わらで葺いていたからうちのほうがヨシ持つて行っても葺けなかつたもんだよ。藁わらだの麦からやっておったから。ヨシだとやり方別なもんだから、職人こつちから引つ張つてつて、葺かせたんです。そのころ、俺は古川あたりで職人を10人くらい使つて、1年に10軒くらい屋根を葺いた。昭和24〜25年ごろが一番で。昔からの職人は今はもう何人もいなくなっている。

構成／平川全機

## 北上川の河川改修

## 暴れ川、北上川

北上川は岩手県岩手町を源流とし、長さは249キロメートルで全国第5位である。その下流部、宮城県下では江合川などと河川が複雑に交差し、「ヤズ」や「ヤチ」と呼ばれる湿地が広がっていた。そのため、この地域の治水・流域の開発はいつの時代においても課題となっていた。北上川の河川改修の歴史は長い。洪水のたびに流路が変わり、幾度となく河川改修が繰り返され、過去の河道の変遷については分かっている点も多い。ただ、現在のような固定した河道はなくヨシなどが生い茂る低湿地が広がっていたことは確かである。

## 河川改修の長い歴史

古代においては坂上田村麻呂さかのうえたむらまろによって780年ごろに改修が行われたと言われている。江戸時代に入り、新田開発・舟運路整備のために本格的な整備が始まった。1610（慶長15）年には仙台藩の白石宗直が、登米とみの新田開発のため中田町浅水に「相模堤防」と呼ばれる堤を築き、流路を変更した。それでも、舟運の不都合や洪水の発生があった。こうしたことの解消のため、伊達政宗の命によって、長州出身の技術者川村孫兵衛が河川改修にあたった。その工事は1616（元和2）年から1626（寛永3）年の10年にわたり、河南町かなん和渚で北上川・迫川はさまがわ・江合川の

三川を合流させ、鹿又かまたから石巻までの流路開削などの工事を行った。これによって、石巻は北上川の舟運、当時の蝦夷地（北海道）や東北と江戸を結ぶ東廻り航路の要となる湊として発展した。時代が明治に入っても、明治14年（1881）に北上運河が北上川河口から鳴瀬川河口なるせがわまで開削されたように、引き続き舟運は重要な輸送手段だった。北上川も多くの船が行きかっていた。しかし、東北本線が明治23年に盛岡まで開通すると、その役割を鉄道に譲ることになった。

## 新しい川筋の掘削へ

そうした中、明治43年に起きた洪水をきっかけとして、柳津やないづ（登米市津山町とみやま）から北上川を分流して洪水の際の出水を追波湾へ流す大規模な河川改修計画がたてられた。新しい川筋と河口を作ることで、スムーズに出水を流し堤防のない石巻の街を守ろうというものだ。

明治43年の水害について、釜谷崎かまやさきの古老の話として「大川村と橋浦の間で水没しないのは大須堤防だけで殆ど大海の様相を呈し、帆掛け船が食料や救援物資を積んで田の上を航行した」と当時の被害の大きさがつづられている。

この改修工事は北上町内ではどのように進んだのだろうか。『概要 北上川第一期改修工事誌（明治44年〜昭和9年）』（1977年）をめくるとその工事の概要がみえてくる。事業は、まず土地の買収から始まる。大正元年（1912）1月6日に関係町村長・区長・有志・被買収関係者を集めた説明会が開かれている。その翌日の1月7日より買収協議に入り、1月末には79%の協議が成立したとある。多くの田畑・住宅の移転を伴う工事にも関わらず、買収は驚くほど早く進んでいた。2年後には買収がほとんど終了したという。

### 1

『北上町百年の概要』  
（北上町史編纂委員会、1975年）による。

その翌年の大正4年に工事が本格的に始まる。追波川筋を浚渫・掘削して川幅を広げ、その土砂を使って堤防を作るといふ工事が行われた。大正6年、7年には第一次世界大戦による労力不足・物価の高騰があり工事が滞ることもあったようだが、昭和5（1930）年3月12日に柳津から北上川の水が新川へ分水され、昭和6年に初代の飯野川の可動堰が竣工し一連の工事が終わる。

### 移転した集落

20年弱を費やしたこの工事によって北上町周辺の様子は大きく変わったのだ。追波川の川幅は大きく広がり、その中にあった釜谷崎、大須の2つの集落はすべて移転することになった。集落の周りに広がっていた田畑もまた川に没することになった。

大須の敷地は、河川改修によって浚渫された土砂の上に建てられたので「丁度砂漠の様相を呈した。風が吹くと砂が飛んで濛々と砂煙がたち、部落民はどうしてこの砂漠に住みつくことができるかと心配した<sup>2</sup>」とある。このように移転後の集落すなわち現在の大須や釜谷崎での生活は当



旧北上川分流施設  
現在改築が進んでいる。

2  
『北上町百年の概要』  
（北上町史編纂委員  
会、1975年）に  
よる。

---

---

初は非常に厳しいものであったことが見受けられる。

文／平川全機

---



さとうけんじ  
佐藤健児さん

「16歳のときに運転免許をとり、

オート三輪でたくさんヨシを

運んだものです」



昭和16年（1941）生まれ。運送、ヨシ販売業などを経て、昭和59年より北上町町議、平成7年（1995）より平成17年まで北上町長。

ヨシをめぐる争いから海苔<sup>のりず</sup>養生産へ

——昭和初期、河川改修後の北上川に出現したヨシ原について、集落同士の争いがあったと聞いていますが。

うちのじいさんたちが相当騒いだらしいですよ。やっぱり釜谷崎<sup>かまやざき</sup>と大須<sup>おほす</sup>はね、元の田んぼだったからと、いうことで主張したらしいんだけど、山手の人たちがね、平等にしろと。ずいぶん騒いだらしいんです。騒いで騒いで、警察も入ったらしいですよ。いま、面積で言うと、釜谷崎と大須が一番多いんです。元の田んぼだったということだね。

昭和の5、6年ごろ、海苔<sup>のり</sup>養用のヨシの刈り取りが始まったらしいんです。葉が青い夏の時期にヨシの

葉をこいて（剥ぎ取って）、穂先のほうだけ使えます。ずいぶん出荷していたらしいんですけどね。  
釜谷崎海苔養生産組合<sup>1</sup>というのを作ってね、うちの祖父が幹部をやっていたそうです。同じころ、向かいの釜谷地区、あるいは月浜、吉浜地区も海苔養生をやったんです。

## ヨシの商売が始まる

ヨシの商売はね、うちの親父がルーツなんです。昭和7年ごろ、親父が初めてヨシの商売を始めたらしいのです。そのあと昭和23年ごろに鈴木さん（現在のスズキ産業）が始め、そして、熊谷さん（現在の熊谷産業）もヨシを始めましてね、ここ（釜谷崎）で3軒あるんです。

海苔養生産組合で海苔養生用のヨシをとっていたころは、海苔養生に適さないヨシがあるんです、親父はそういうヨシを商売で刈り取っていたんでしょうね。

親父が商売をしていたころは、90パーセントが屋根用のヨシだったんです。私のころになるとそれが逆転しまして、80パーセントが建材用だったんです。土壁ですね。うちの親父は、ヨシ以外にも、網引き、とかやってましたね。田んぼもやってました。

あと精米所だの、製綿所だの、いろんな商売をやってました。製綿所というのはね、布団の綿の打ち返しのことです。布団を天日で干すだけだと固いから、親父が夏場の収入源として始めたんです。綿の打ち直しは大きな機械があつてね、ギザギザした歯が高速で回って、それが綿を裂いてふわつとなるんです。精米所の方は昭和22〜23年ごろからやっていました。電線がなかなか買えなくて困ったそうです。しばらくはこのあたりで1ヶ所だけの精米所でした。当時はみんな現金をもつてなかったからね、精米してあげて、盆と正月に集金していました。その後、精米所は各集落でやる人が多く出たため、うちではやめたん

### 1 釜谷崎海苔養生産組合

河川改修後の北上川河川敷に昭和初期に生えてきたヨシから海苔籾を生産して販売するため、昭和6年（1931年）に地域で設立された組合。海苔籾の生産加工・販売とその関連事業を目的とした。この組合が県へ出した「葦菅払下願い」が『北上町史通史編』（2005）518ページに掲載されている。

### 2 網引き

網を引いて魚を捕ること。

です。私が中学校1、2年のころでした。

刈り子はね、うちの親父の代にはけっこう雇ってましたね。私の代になってからは刈る人も少なくなっちゃったんです。その後、3人（熊谷、鈴木、佐藤）でいっしょにやるようになったんです。刈ったのを三等分するようにしてね。

茅葺きはね、昔はずいぶんありましたよ。うちでも、昭和35年ころにはあつたんだから。草葺きの屋根なんかもあつてね。そのころは、契約講<sup>けいやくこう</sup>で屋根用にとつておいたものです。入札にかけないでね。屋根を葺く家が刈つてました。屋根はちゃんと差し茅<sup>3</sup>してましたからね。結い<sup>4</sup>でやつてましたから。結いで屋根をやつたのは、いつだったかな。春か秋、みんなでやつたもんですけどね。昭和45年ころにはもうやらなくなつてましたねえ。職人さんは釜谷崎にはいなかったから、大須<sup>おおす</sup>や吉浜から来てもらつてね。長尾<sup>ながお</sup>にもいたな。今はもういなくなつてしまいましたけどね。

## 輸送

親父の時代は、まだトラックとかもありませんでね。平田舟<sup>5</sup>で運んだそうです。また現場からは馬車使つて家まで運んだそうです。今でいう涌谷<sup>わくや</sup>や短台<sup>たんたい</sup>（ともに宮城県涌谷町にある）の方まで行つたらしいです。上流の方ですね。南郷町<sup>なんごう</sup>（現在の宮城県美里町にある）や河南町<sup>かなん</sup>にも出してましたね。

親父の仕事を手伝うようになったのは33、34年ごろでね、16歳のときにね、運転免許をとつてオート三輪<sup>6</sup>に乗つたんです。それでヨシを運びました。そのころは佐沼<sup>さぬま</sup>（現在の宮城県登米市にある）へたくさん力ヤを出していたんです。そのころですね、屋根用と壁用が逆転し始めたのは。佐沼には壁用で出したんです。佐沼に菅原商店という仲買人がいてね、そこへよく運びました。うちから佐沼に出して、そこ

### 3 差し茅

屋根の修復のため、傷んだ茅を差し替えること。

### 4 結い

農村地域で、集落の人々が作業を助け合つて共同で行うこと。

### 5 平田舟

底に平たい板を張つた船。江戸時代以降、河川や水路などで物資を運ぶのに多く用いられた。

### 6 オート三輪

主に貨物運搬用に用いられた、三輪（前一輪、後ろ二輪）の小型自動車。1940年代から1950年代にかけて隆盛を極めた。

から菅原商店が岩手県や山形県に出していたんです。

### ヨシの仕事を父から引き継ぐ

親父から仕事を引き継いだのは、昭和47、48年くらいですかね。引き継いだときは、もうなかなか県内での需要が少なくなってきたね。それで長野県の軽井沢の商売の人と付き合いましてね。土壁用のヨシですね。軽井沢の人が、どこから聞きつけたのか突然やってきてね、契約したんです。軽井沢の業者は3、4軒あってね、そのうち2軒と付き合いがあったんです。軽井沢にもヨシ原はあったんですが、開発で半分以上なくなっちゃったんです。

軽井沢へは、河南町の鹿又駅かのまたから貨車で出荷しました。最初は貨車もなかなかとれませんでね。とれても、子供たちが駅の構中でヨシをすべり台にして遊ぶとかで、いろいろあってその日のうちに貨車に積みねばなりませんからね。オート三輪で運んでいって、貨車に載せたんです。それが5、6年くらい続きましたかね。そのあとちょうど第一次オイルショック7（昭和48年）のころ陸送になったんです。運送会社に頼んでね。陸送も大変でしたね。雪もあるし、碓氷峠もある。軽井沢へは何年くらいやったかなあ、7年くらいやったかなあ。

### 新潟や軽井沢へヨシを出す

軽井沢から2年くらい遅れて新潟とのつきあいが始まりました。昭和50年ごろですかね。新潟の業者が鹿又駅へ来てね、そこで聞きつけて、私のところに来てきたんです。

#### 7 第一次オイルショック

1973年に起きた石油の急高騰。第四次中東戦争をきっかけに、アラブ産油国が原油の値上げを行ったことで、世界経済に大きな影響を及ぼした。

新潟でヨシの需要があつたのは、第一次オイルショックのころでした。土壁ですと強いんです。土壁の中に、横も縦もヨシが相当つまつてて、土壁の厚さ3センチから4センチなんですけどもね、それが強く。あとは雪が降りますので。今の建材だと、結露がたまつちゃうんですよ。でも土壁だと、それを全部吸い取ってくれますから。でも工期の問題がありましてね。土壁だと1ヶ月から2ヶ月はかかってしまふんです。今でも茶の間の一部とか押入れに、新潟では土壁を使っている家があるんですけどね。新潟の業者はずっと同じところです。三条（新潟県三条市）ですね。

新潟とのつきあいがあつたところがいざばん出荷数も多かつたんです。それで、ここのヨシ場で足りなくて、ずいぶん上流の方の桃生町（現宮城県石巻市にある）とか豊里町（現宮城県登米市にある）とかまで行って買ってきたんです。あっちの方は少し長いので、もとの方を若干切つて、うちの方のと混ぜて出荷したんです。最盛期はトラック30台分出荷していましたね。今は新潟とは1社とだけつきあいがあつて、1〜2台。最盛期の何十分の一だね。ここ6〜7年でがくつと減りましたね。

新潟や長野と付き合いだしたのはうちが初めてぐらいでしたね。熊谷さんや鈴木さんも私の少し後で軽井沢に行くようになったみたいですね。だいたい同じ時期くらいに。独りではおっかなびっくりでしたから、熊谷さんも鈴木さんも組んで仕事をやつてね。

新潟に出している間も、屋根用もあつたのですがね、屋根葺きさんが高齢化してね、亡くなった方もいますね。今は熊谷さん（熊谷産業）が若い人たちを育成してますがね。

葦簾も一時やつたんですがね、昭和60年ごろですかね、滋賀県の近江八幡（滋賀県近江八幡市）に出しました。しかし、中国からどんどん入ってくるようになって、2〜3年でやめました。

## ヨシ刈り

——ヨシの刈り取りの申請は、どうするのですか？

面積でなくて、束数で申請するんですよ。だいたい実績が決まってきましたから。あそこの部落は、だいたいどれくらい束数で申請するのだから。

今度、石巻市になりましたけど、調整とかは変わらず支所（北上総合支所・旧北上町役場）でね。前年度と、実績と束数を確認します。

——ヨシの善し悪しは何で決まるんですか？

固さと太さですね。長けりゃ太くなりますけど、あんまり長くてもね。屋根用と土壁用ではまた違いますね。我々はこう、長いヨシの中から順に選別しますよね、それで長さそろえて、だいたい10尺（約3メートル）、9尺（約2・7メートル）にそろえて、9尺以下を屋根用にしてね。長いのが土壁用でした。新潟のほうでは10尺から9尺使うのが主流でしたね。6尺（約1・8メートル）使って、あと3尺（約9センチメートル）を組む壁で使って。9尺以上のものがほしいと。だいたいまあ10尺、11尺のものを使いましたね。固さはね、屋根用でも土壁用でも、固いほうがいいんです。太さは、だいたい10尺から9尺ぐらいいが細くも太くもないからね、そういう選別方法なんです。

——ヨシを機械で刈るようになったのはいつごろからですか？

手刈りから機械に替わったのは昭和56年あたりからかなあ。コンバインなんかを改良しながらやっていったんだけど、うまくなくてね、草刈りのモアを使うことにしたんです。風に向かって刈るのがコツなの

## 8 ヨシの申請のしくみ

ヨシの生えている河川敷は国交省管轄の公有地のため、河川法（第25条）に基づき、河川産出物として利用するための申請をしなければならぬ。旧北上町の場合、各集落単位で申請するが、その際、旧北上町役場（現北上総合支所）が調整の上、国交省に申請し、さらに河川法（第32条）に基づいて「河川産出物採取料」を宮城県に支払う。



北上大堰  
北上川河口から17  
キロメートルのとこ  
ろに位置する堰。上  
水道・工業用水  
の確保を主な目的  
として、昭和49年  
(1974)に建設  
された。

ですが、ヨシ原に行くとなかなか風が吹かなくてね。

ヨシ商売というのは、刈り取りから全部人を使う商売だから、人手がいなくなつたのが致命的なんです。刈り手がいなくても、すから、いいところだけ刈つて、刈り残しが出てしまつてね。

### よいヨシが生える場所

——ヨシは場所によつて違うんですか？

もとは北上大橋のあたりがほんとに汽水域で、よかつたんですけどね。大堰ができてからはもうすつかりだめですね。塩が多くなつてからは、中州のあたりがいいんですね。今中州のヨシが屋根ヨシとしては最高ですね。大橋のあたりのヨシはね、土地がいいから長くはなるんだけど、その分やわい部分もあつたりしてね。塩だけじゃなくて、土地の高い低いもあるんですよ。地盤のいい所が、建材のヨシはいいけども、屋根のヨシにはちよつとね。中州は地盤もいい。ヨシがまっすぐになるし、固くなる。大橋のあたりがもう30〜40センチ高いといいんですけどね。低いところなんかはいつも水が浸かつて地盤が弱くなりますからね。

### 9 汽水域

河口域や内湾など  
において、海水と淡  
水が混じっている地  
域。

現在のヨシ刈りの様子



上 ヨシを刈り取る  
現在は、こうしたモアと呼ばれる草刈機を使う。鎌を使った手刈りはほとんど見ることができない。



中 ヨシを束ねる  
刈り取ったヨシは束ねる。この1束を「1丸」と呼ぶ。



下 ヨシを運ぶ  
谷地から束ねたヨシを堤防の  
際まで運ぶ。



上積み上げられたヨシ



刈り取られたヨシは各業者の倉庫へ運ばれる。  
中ヨシを運ぶ



下業者の倉庫  
ヨシは、冬期間にしか刈り取ることができない。各業者の倉庫に1年分が貯蔵される。

——東北丸の浚渫もヨシへ影響をもたらしましたか？

減りましたよ。中州なんてずいぶん減ったんじゃないかな。釜谷崎なんて全部なくなっちゃったですからね。河口のほうの中州は半分くらいになっちゃいましたからね。良いヨシはあんまり生えてないところだったんですけどね。東北丸はとにかく掘りましたからね。北釜谷崎、三角谷地、長尾や馬鞍の方まで、田を埋め立ててましたね。まあ田んぼがあったとしても、湿地帯でよくなかったですからね。反対もなかったですね。

## 牛の放牧と草刈り

——河川敷では以前牛が放牧されていたんですよね。

堤防に牛を放していたんです。酪農牛（乳牛）でも黒毛牛でもね。そして堤防の草を食べさせて、そのために我々は学校から帰るとすぐに牛のところに行ったものです。牛は毎戸にいたものですから、当番制で牛を堤防の大須の境まで放して、1人か2人で番兵して。もうこの辺は毎戸飼っていますね。多いところで2頭くらいだったかね。あとは1頭くらい。

牛の番をしたのは、（牛が）田んぼにはいつて稲を食べるものだから、それを防ぐために。田んぼにはいつて食ったこともあるんです。そういうときは大目玉くってね。

牛を放牧したのはヨシの生えていない高い場所でしたね。北上大橋のところはね、オギ<sup>11</sup>なんかが多くて、朝草刈りとかもしてましたね。小さな中州みたいになつてるところがあつて、舟で出かけたりしたんです。舟に耕運機を乗せていきましたね。（改修前の釜谷崎は）元々、（北上）大橋のあるところから100メートルぐらい上流のところに住んでいたそうです。当時、私は酪農で牛を4頭ほど飼育していました。（草を）

### 10 東北丸

本書37ページ以下、「東北丸」を参照。

### 11 オギ

イネ科の多年草。 *Miscanthus sacchariflorus*。外見はヨシに似ているが、ヨシよりも若干陸地側に自生する。

水田の堆肥用にとも思ってたね。6丸くらい刈ってきたんです。昭和35年くらいのことです。共同で3、4軒くらいやっていました。

今と違ってね、水田のそばに生える草も全部牛に食べさせてましたからね。その後は、堤防の上に生える草もね、釜谷崎22軒あるんですけど、それを分けてましたね。昭和50年のころにはもうやらなくなりましたけど。今はもうほとんど分けてません。牛を持つてる家は刈って食わせてますけどね、もう(残っているのは) 1、2軒くらいかな。

### ヨモギと虫とり・魚とり

上流のところは、河川敷が高いもんで、ヨモギが大きくなるんですよ。2メートルにもなるんです。それが一度に刈り取るもんですから、それをトラックにもつてきて、前にいっぱい置いて、我々がそれを運んで、それを木の代わりに風呂にくべたんですよ。

部落(釜谷崎)に来る途中、橋の手前に「すなつぼ」って呼んでるところがありましたね。ヒバリの巣だとか、大きなバツタがいますね。それを我々がとりにいったんです。河川改修したときの砂が山のよりに積んであって、砂つばらになってましたね。

カワエビもとりましたし、イモリがたくさんいましたね。おがわ女川に親戚がいたんですけど、そこへ行って、田んぼでモンペ<sup>12</sup>みたいなのを履くと、そのなかにイモリが入ってきてね。それが嫌で嫌で。家の近くの排水溝、U字溝は、堀になってましてね。春にね、ナマズがたくさんいるんですわ。今の農道つくっちゃったから狭くなっちゃったけど、昔はナマズたくさんいたんです。蒲焼にしたりね。ウナギどんぶりみたいにして食ってたんです。

### 12 モンペ

ゆったりとした袴(はかま)の一種。農山村の労働着、女性の作業着として多く使われてきた。



写真の船は、石山潔さん（大須在住）のもの。  
シジミ漁の船

## シジミ漁

——佐藤さんはシジミもやってらっしゃいますね。

シジミは熊谷さんが始めたんです、商売としては。その後、4軒増えまして、今でも釜谷崎<sup>かまやざき</sup>で5軒、大須<sup>おおす</sup>で5軒、計10軒しかないんです。許可を持っているのは、元の橋浦村<sup>はしうら</sup>です<sup>13</sup>ですね。

今でもシジミ漁を10軒でやっています。それはもう固定で、参入はできないんです。組合で決めてあるんです。

私もね、シジミ採りやるっていうんで大きな船を買ってきたんです。それで今はもうシジミ少なくなりましたけど、当時は2トンとか採ってました。昭和40年代ですね。前はそんなに需要とかなかったんですけどね。売れなくて、仙台にまで行ったことあるんです。なかなか新規のところは取り扱ってくれませんでしたね。

やつぱり、大堰ができてからはダメですね。シジミも一番いいところに移っていくから、前はここの大橋のところがよかったんですけど、今じゃあんまり採れないね。ほとんどん汽水域が上流へあがつてっちゃってね。脇谷水門<sup>わきや</sup>の改築<sup>かきせき</sup>ははかなり漁協も騒いだんですけどね。濁流しか流れてこないというので。北上川の水20トンぐらいは出せるっていうので許可しちやっただんです。今工事してるんですけどね。

### 13 橋浦村

旧北上町の西半分を占めていた村。1889年に十三浜村と合併し北上村（1962年に北上町）となる。

### 14 脇谷水門の改築

旧北上川流域（石巻）は、河川護岸が低く洪水常襲地帯である。この対策として「新北上川」と「旧北上川」とを分流する鴉波水門と脇谷水門施設を改築する。洪水時に水門を閉めることで、増水時には旧北上川の水を新北上川に流すことが可能となる。

## 濁流問題

——北上川をめぐっては「濁流問題<sup>15</sup>」がずっと問題になっていますね。

洪水のときに北上川の濁流を100パーセント流すんです。新北上川に濁流が流れてくる。あまりにも不公平だつていうので、こつちの漁協は困つてるんです。合併して石巻といっしょになつたんですが、石巻の方が人口多いですからね。洪水になると上流のほうから子牛の死骸などが流れてきたりするつていうので、濁流問題協議会を作つたんです。今は毎年上流の方から700人くらいの人々が来てもらつて清掃活動とかしてますけどね。

ここは一度河川改修で買収があつて、また堤防の拡幅工事のために十何年か前に買収がありましたからね。ですからね、釜谷崎と大須は、二度も犠牲になつてるんですよ。今、十三浜<sup>じゅうさんびな</sup>でホタテだとか昆布とかが減収しています。濁流が来ることでね。ただ悪いことばかりじゃないんです。カキはよくなつて、でも清水<sup>せいすい</sup>も流してもらわないと困ると。濁流問題協議会で話し合っています。

構成／宮内泰介

### 15 濁流問題

北上川の改修工事以降、洪水時に追波湾沖に大量の濁流が流れ込むことで養殖のカキやホタテなどが泥をかぶり、漁業に深刻な被害を生じさせる問題。対策として「北上川濁流対策協議会」が設置されている。





昭和8年生まれの大槻宏さん（追波在住）が、東北丸に乗り込んだのは21歳の時だった。知り合いから、浚渫船が北上に来るのでやってみないかという誘いがあったという。乗組員は旧石巻市、旧河北町など地元民が多く、旧北上町内では2人が旧建設省に雇用された。東北丸は、川面に突き立てた機械の先端につけられたカッターで川底の土砂を削り、それをポンプで吸い上げていく。このとき、土砂だけでなく水も一緒に吸いこんでいく。その土砂の捨て場であった田んぼでは、そのまま水も土砂も一緒に客土されていた。その様子は、除雪車のように土砂を持ち上げて運ぶのではない。東北丸から石油パイプラインのような排出管を水上と陸上につなぎ、その中を泥水が通り田んぼに流し込まれるといった感じである。

浚渫する際に、ゴミはもちろんのことさまざまなものが巻き上がった。こんなエピソードがある。

「シャレコウベかなんかよく来るんだよ。墓地がよくあったんだな。（東北丸で）吸う方では見えないもん。シャレコウベ来たから今日はいっぱいやるべえ。何かあると飲むから（笑）。一関の公害でよく人も流れてきたしね。」（大槻宏さん・追波在住）

東北丸が浚渫した場所は、釜谷崎かまやざきなどの部落がもともとあった場所で、墓地や庭石などが邪魔になってカッターの刃が曲がってしまったたり、ポンプが詰まったりしてしまい、そのたびに潜って取り除く作業が必要だった。大正から昭和にかけて、追波川から新北上川へと河川が改修される際に、先祖代々続いた生活空間そのものを泣く泣く手放さざるをえなかった。その土地が川に沈み浚渫の対象になっていたことが、このエピソードからもうかがえる。

それでは、客土を受け入れる側の人々はどう思うか、田んぼに土を入れたのだろうか。

3  
当時は船長、副船長、操縦、機関、電気・機械の専門職、そして船と陸上の両方の作業を担当する看板員まですべてが国家公務員であった（『浚渫船東北丸』1994年）

溲された土砂の中には、汽水域つまり海水の混ざった水が含まれていた。その塩分が田んぼに残ることで塩害にさらされる心配があった。このため農家のなかには反対をするものもあった。しかし、実際は東北丸で土砂をふいた乾地では、塩害は起こらず逆に米の収穫があがった。その実績をみて、東北丸を受け入れる農家が増えていった。ただ、客土した後は、塩が抜けるまで3〜5年間その田んぼは使えなくなる。いまだに夏の日照り時に塩が浮いてくる。しかし、耕運機で毎年耕すことで自然と砂が沈下していき、泥が上にくる。土砂を受け入れた背景には、谷地やちは草の根が腐って真つ黒い形で土壌の下に残存し、本当の土壌にならず、砂と土が混じったときに米が一番うまくなるのだという説があった。かつては、二丁谷地に「すなつぼ」と呼ばれた砂山があり、その砂を運んで田んぼに入れたこともあった。しかし、それでは良い田んぼにするには土砂が不足してしまうので、東北丸に客土してもらうことではじめて土壌整備ができたところもあった。

この客土を望む住民たちの受け皿として、耕地整理組合とは別に、流水客土組合が作られ、そこから申請する形をとった。溲溲の土砂は捨土なので無料であったが、その後区画整理をする際にはコストがかかった。ある部落では地権者に対して整地に1反あたり15〜16万円の費用を要した。というのは、客土は田んぼも農道も関係なく一定の区域全面に土砂を流し込むという形で行われたからだ。そのため、農道も畦畔もどこにあったか分からなくなる。それをあらためて測量をおこないブルドーザーで直して区画整理をし田んぼを作る必要があったのだ。当時客土をどれくらいの時間という風にふくのかについては、東北丸の乗組員たちの裁量如何にかかっていたため、各組合の人たちが船員に酒を差し入れたこともあったという。

今考えればラムサール条約にも登録されたかもしれない大沼は、溲溲土砂の格好の捨て場所

---

---

だった。1回だけではなく、昭和33年と昭和50年代に3回にわたって客土された、というよりも埋め立てられたといったほうがいいかもしれない。大沼は今は広大な美田へと変わった。こうして東北丸によって客土された土砂の総量は東京ドームに換算して約4倍にのぼり、旧河北町かほくでは水田の4分の1、旧北上町では4分の3もの田んぼがその恩恵を被ったことになる。

文／金菱清

---

## 牛馬と朝草刈り

コラム

現在北上川の河川敷に生い茂っているヨシ原やシバが生えている堤防の斜面は、かつて牛の大放牧場だった。かつて北上の河畔には、それだけ放牧に適した緑が生い茂っていた。今のよう  
にそのすべてが一面のヨシではなく、様々な種類の雑草であった。これらの雑草を牧草として北  
上の人々は利用してきた。

終戦後しばらくはどの家も牛を1、2頭飼っていた。田んぼの土を掘り起こすために作業用の  
牛が必要であったし、農家の副業として乳牛も飼われていた。乳牛は、牛を妊娠させて出産まで  
育て、出産とその後の搾乳期間は飯野川と石巻にあった牛乳屋さんに預けて6ヶ月間乳を絞らせ  
る。期間いくらかという形で契約してお金をもらっていた。搾乳期間が終ると返してもらい、また  
妊娠させて牛乳屋さんに預ける、というサイクルを繰り返した。

こうした牛の餌となったのが北上川の河川敷や次のような大沼周辺の牧草であった。

「朝にほれ、谷地、女川沼（大沼）さ行って、刈ってくるんだよ。草刈り場なんだね。  
ほとんど。やつぱり、二丁谷地道路つてさ、馬歩く道路、まっすぐに走ってあったからさ、  
そこ、ずーんと馬、歩くんだから、刈った草、積んで。そいつを利用したんだね。立派  
な道路、付いてたんだね。」（千葉信男さん・追波在住）

春から秋にかけて畑などで刈った草を、馬小屋に入れて食わせ、余った草を厩肥つまり堆肥に

していた。

河川敷では区域によつて植物の種類や生育に差があった。潮水に浸る大須や長尾では、雑草など短い草は生えてこない。それに対して本地では、「(本地の)谷地は潮がのらない、たかつぽだったから。わりと雑草もいい草生えてるのね。」(山内章さん)というように、牛を放すには好都合な所だった。部落内では当番を決めて2軒1組で牛追いをしていった。お盆を過ぎると、河川敷の草が少なくなる。反対に田んぼの稲穂は実ってくるので、その時期からは田んぼに牛が入つていつてしまった。そんなときには、ひとりが田んぼに入り牛を押し上げ、もうひとりが反対側でひっぱりあげた。牛が田んぼに入らないようにする監視要員の役割も牛追いは担っていた。毎朝牛を子どもたちが連れて行き、昼間は大人が交代して当番をした。子どもたちは学校が終わると牛を連れて帰るといふ作業を繰り返していた。こうした放牧は、旧建設省が北上川の堤防の斜面が壊れるのを防ぐために牛の放牧を中止するよう指導する昭和30年(1955)ごろまで続いた。

また、草は人の手によつても刈られた。今のように雑草を除草することが目的ではなく、雑草を積極的に利用するためである。牛の飼料を調達したり萱葺きに利用したりするために、部落の契約講で労働に出て刈り取り、馬車で運んだ。その多くが家畜の餌用であった。部落から駄馬が10頭も20頭も列をなしてヤチに入つてカヤを刈ってきて餌にしたという。

「比較的(河川敷の)低いところは、カヤが多かったが、それ以外のところは家畜の餌料にしていた。それでも屋根カヤとして、各部落が契約講があつて、結の制度でやってきた。今と比べると、半分近くが家畜のえさに刈り取られた。朝草刈り」といつて、毎朝刈つていた。」(武山武志さん・女川在住)

当時はカヤと草とを選別せずにクサカヤといつてカヤ（ヨシ）とその他の草が混ざったものを使つていて、混ぜつていてもそのまま売れた。そして自分達の屋根に用いた。刈った後何も残らないほど人々はヨシや草を家畜の飼料や肥料にするために毎朝刈つて利用していた。これらを総称して「朝草刈り」と呼んでいた。終戦後、次第に配合飼料が普及し、河川敷の草を家畜には使わなくなる。植生がヨシに変わるとともにそれを扱う業者が参入する。「商品」としてカヤそれ自体の価値が高まつていった。そして、河川敷一体は現在のようない一面のヨシ地帯となつた。

各家にいた牛や馬が消えた正確な時期は定かではないが、東北丸<sup>1</sup>による田んぼへの客土が大きな転機となつている。客土によつて田んぼが湿田から乾田へと変化する。湿田を耕す際に活躍していたのが、牛や馬であつた。ところが乾いた田んぼになるとぬかるみにはまる心配もなくなつたので、効率の良い耕運機を入れることになる。その結果、それまで働いていた牛馬は「お役御免」を申し付けられることになる。それとともに草刈りも次第に必要がなくなつていった。

全戸で飼育されていた牛馬は農業の近代化の陰でほとんどいなくなつていった。しかし、現在でも形を変えて牛は飼われている。酪農である。その1人の石山潔さんは東北組合飼料（家畜の飼料会社・現在北日本組合飼料）に22年勤めたあと、今から9年前退社をし、一年を通してノラに出ている。春は田植え、夏はシジミ漁、秋は稲の収穫、冬はカヤ刈り。その間に朝・晩牛の世話をしながら、牛乳を出荷する。動物を相手にするこの仕事は一年中休みのない状態で、本人いわく「コンビニと一緒ですよ」と笑みを浮かべる。牛の用途や生業の組み合わせは、時代の変遷を追つていくと実に多彩で、時代に合せて変化していることがわかる。

旧北上町全体でも一時期牛に力を入れていた時代がある。それが町営牧場の造成である。かつては山村地帯の主な生活の糧は製炭で、山一面が丸裸になるほどであつた。しかし炭が廃れ売れ

#### 1 東北丸

詳しくは、本書37ページを参照。

なくなると山は使われなくなった。旧北上町では山林面積の7割が国有林ということから、大内町長（当時）がその本格的な活用を図り、酪農振興を目的に昭和41年から大盤おおばん平だいらで牧場経営を始める。

「牛の放牧って、全部は放牧してないから。結局、仔牛を放牧するだけだし、うちさ、残す牛だけ放牧するわけさ。メスだけね、大盤平で。5月ごろだね、放牧を頼む。委託するわけさ。1ヶ月ならぼつて、結局取られるわけさ、タダでないから。放牧も、（所有地に）大きな放すところ、柵回して放すところもあるんだけど、結局頼んだ方が無難だからね。」（千葉信男さん）

4月下旬から11月上旬の約6ヶ月間大盤平に預け放牧する間に100キログラム以上も牛の体重が増えた。当時、子牛の時に放牧することは成長時の骨格形成のために非常に良いという考えがあった。町営牧場で放牧することで、そのような丈夫な牛を養成しようという計画であった。しかし酪農計画も利用申し込みが激減し、平成19年



町営牧場から北上川の流れをのぞむ

2  
『石巻かほく』  
日 1987年4月24

---

---

(2007) 休止に追い込まれている。



文／金菱清

---



# 水の章



ちばのぶお  
千葉信男さん

「田んぼ、酪農、ヨシ刈り、養蚕…

とにかく、いろんなことをしてきたの」



北上町追波集落に暮らす千葉信男さんは、「とにかく、いろんなことをしてきたの」と言う。信男さんは、大正14年（1925）に追波集落で生まれ、幼いころからずっと、この地域の自然とかかわってきている。もちろん子どもころの遊び場も、家の周りの山であつたり川であつたりと、身近な自然環境であつた。

追波生まれ、追波に育つ

小さいころはこの川で、水遊び、泳ぎだねえ。今みたいに学校でプールなんかねえんだもん。どこで泳いでもいいの。遊泳禁止なんてないんだもん。それでも、事故起きないのね。事故も起きないんだよ、全然起きないの。そして夏あたりはほとんどなんだ、やっぱりシジミ掻きしたんだね、結局。泳ぎながらシジミ掻きしてさ。小さいのは掻かないんだわ。そう、だから桶を持っていくわけだ。昔は桶だから。帰りに桶さ、一杯、シジミ掻いてたんだわ。だから、この内川（皿貝川）でシジミ掻けんだもんねえ。どつ

さり搔けるんだもん。

また、シジミだけにとどまらず、同じく皿貝川で魚釣りをした経験もある。

この家の前の川（皿貝川）ではスズキも獲れるし、何でも獲れたもんね。スズキも縄かけて、獲れたもんね。あとサケも獲れるし、秋になるとサケも獲れるの。春になったらマス獲れるの、サクラマス。マスもいっぱい獲れたんだよ、ここ。ハゼだの、いろんな小魚つてきたら、田楽でんがくしたもんだね。田楽つて味噌つけて焼いてさ、おいしかったもんだね。とにかく学校終わって2時くらいになると、ハゼ釣りもしたもんだもんね。

スズキ、サケ、マス、ハゼなど、色々な種類の魚が獲れ、魚釣りをして遊ぶこともあった。ただし、女川集落むながわにある大沼まで遊びに行くことはほとんどなかった。というのも、ひとつには子どもの足で行くには、少し遠いからである。しかし、理由はそれだけではなく、大沼の近くには「おっかない人」がいたのである。

私ら田んぼやるようになってから、大沼行くようになったしや。その前はね、地元でこっちの方でだけ（遊んでいた）。部落が違うからね。向こうに結局ほれ、喧嘩をする人がいて、とてもおっかなくて行かれないさ。だからほとんど行かなかったんだね。今でもある、あそこの店さ買い物に行くのも、本当にもう心配して行ったものさ。竹もって仕掛けて来っから。

北上町の自然と大いに触れ合いながら幼少時代を過ごした後、尋常高等小学校<sup>1</sup>を卒業するまで追波集落で過ごした。その後、高校生のときに一度、当時兄が住んでいた東京へ行き、東京で学校に通った。しかし、昭和10年代といえば戦争真っ只中であつたため、高校2年生でやむを得ず学校を終えることとなり、昭和19年（1944）、兵隊になつた。直後の昭和20年、仙台で終戦を向かえ、以後、家業である農業を引き継いだ。

## 酪農・稲作を中心に

農業の中でも、一番大々的に取り組んだものは酪農である。もともとは両親がはじめたものであつたが、昭和21年ころには、5、6頭の牛を飼育し、朝夕1日2回の搾乳<sup>とろ</sup>をし、牛乳缶4本程度を毎日出荷していた。

酪農つてね、私の親がミルクを自由に買えない時代にね、うちで飲むようにと思つて、乳牛を導入したわけさ。それが増える増える、4頭だの5頭まで増えてさ。自分で増やしたんでなく、よそからまた買入れて、2頭3頭と増えていったわけさ。そして自分の家で飲む以外は、よそさ、みんなくれたのね。昭和22、23年ごろかなあ、澱粉工場<sup>でんぷん</sup>つてね、終戦後、食糧難の時代にね、クズ芋の工場さ、月浜<sup>つきはま</sup>建てた人があつて。そこさ、毎日、牛乳を20キロぐらいつつ持つて行つてくれたのね。自分の家で飲むだけでは牛乳が余つて、処理に困つて、タダであげたの。昔は売り買いとかないからね。

当初は自家用の牛乳を確保するために行つていた酪農であるが、時代の流れとともに農協の組

1 尋常高等小学校

現在の橋浦小学校にあたる、橋浦尋常高等小学校。1908年（明治41年）に橋浦尋常高等小学校として発足した。1930年当時の在学生と数は尋常科433人（男229人、女204人）、高等科76人（男45人、女31人）だった。（『北上町史 資料編Ⅱ 』672ページ）

織も改変されるなど、次第に本格的な家業とし、酪農で生計を立てるようになった。その内に、家の裏にあるもともと持っていた土地に親戚と共同で畜舎を建て、経営規模を拡大した。しかし、酪農の各作業に機械を導入するようになってから、反対にその経営が上手くいかなくなってきた。そこで、平成初頭に乳牛飼育から和牛飼育に切り替えた。

だんだん機械が入ってきて、酪農ではとつても赤字でいかねえからって、和牛さ切り替えたの。繁殖用の黒毛和牛さ、切り替えたの。そして、毎年のように和牛を導入して、九州だのあっちの方から和牛を導入して、和牛に切り替えたわけだ。やめてから今年（平成18年当時）で3年目か。始めた当時はね、酪農もとつても順調だったのね。5年で畜舎建てた分の負債を清算終わる計算で、1年にいくらいくらって計算してやってんだが、その通りにいかなかったのね。最初は廃牛もなにも、20万ぐらいで売れたから。仔牛も10万ぐらいで売れたから。とつても値段は良かったんだねえ、その辺りはさ。だけど、だんだん下がって、結局二束三文になったんだね。そして、雌牛産まれたら自分で跡継ぎにするけど、雄は1ヶ月で出したのね。最初は10万近くまで仔牛したから、男でも値段良かったのね。4〜5年続いたんでないかなあ、順調に。そのまま借金の返済



千葉さんの牛舎  
今は、倉庫などに使われている。

できるなあって始めたんだが、だんだんに下落して。そして、集乳したタンク1本なげるような形になってしまつて、自分で保障しないといけなくなつたから、やめたわけだ。何十万で保障しないといけなくなつたから、パツタリやめて、和牛の方に切り替えて、このころ（平成15年）までやつたわけだ。和牛は、良い牛買つてくると、1頭62万で売ったときもあるの。2頭で100万から超えたこともあるの。やめるまで、みんな50万ぐらいいは超えてたの、うちの牛はねえ。それぐらいいい牛、飼つてたの。とつても値段良かつたからね。

「酪農やりながら、水田もずつとやつてるの」と言うように、農繁期には酪農だけでなく、水田耕作もしていた。利用していた水田は、大沼の2代目所有者であつた渡辺氏と、千葉信男さんの御両親が知り合いであつたことから、女川部落に住んでいるわけではないが、水田としての大沼をかねてから利用していた。しかし、その和牛飼育も平成15年を最後にやめ、今は当時使つていた畜舎だけが家の裏に残っている。

あの時ねえ、私の親が、地主さ仕えたわけさ。地主の雇い人がね、二丁谷地<sup>にちようふち</sup>さ来て、あそこのほれ、一切の管理みたいなやつてたんだね。そこさ1人だから、私の親も一緒に勤めたわけ。あのね、地主と小作つてね、やつぱり分けて、田、作つたんだね。そうやって、獲れた（収穫があつた）際には、石高によつて分けることになつてるの。そしてほら、その分け前でもらつたわけなんだね、田んぼ。権利をもらつたわけさ。小作権を買つたんでないかね。そういう話だ。

コラム（60ページ以下）でも取り上げるように、大沼の「浮き谷地<sup>うきやち</sup>」を水田として利用する

## 2 浮き谷地

水草などが生え、沼水が溢れると苗を植えた田んぼが浮き上がつて流されるような土地。（『北上町史 自然生活編』311ページ）

ときには、さまざまな苦勞が伴った。

台風でも来つと、大沢堤防決壊するでしょ。そして、あそこ遊水池だから、結局たつぷり水がある。風に乗ってあんまり水位が高くなると、霧で流れんだね。風が強いと（霧で流れたように見えた）。二丁谷地さ、みんな流れ着いたんだね、あそこ。砂の丘まで流れ着いたんだね。だから結局ほら、小作人が竹を持って行って、流れないように刺したりして。それで浮き谷地でもみんな稲作つたんだもんね。結局、よそさ流れたものは、自分のものでなくなってしまうのさ。流れ着いた土地の人の、みんな肥料になってしまうのさ。みんな流れないように工夫したんだもんね。

たとえば、各人で竹を刺して杭を打つなどの対策を施していたとしても、大雨や強風によって水田が流されてしまうことは避けられず、それに応じるように収量もなかなか上がらなかった。

（干拓以前はお米が）穫れなかったの、（干拓後と比べると）何分の1だね。やっぱり流水客土。つて、川の良い土葺いたから。（初めの）3年くらい塩分で穫れなかつたけど、やっぱり山からの用水が良くて、やっぱり塩分を抑えたんだね。それで穫れる時は10俵近く、600キログラムくらい穫れた時もあったもんね。だから、上田と変わらなくなったのね。上田よりとれるようになったの。最初、無肥料でとれたの。ヘド口、結局泥ばっかり入った田なんだ。無肥料で穫れたのね。みんな喜んだね、結局美田になって。流水客土で沼つてもん、なくなったもん。全部あのカヤ（萱）野が、見渡す限り全部カヤ野でなくなったもの。みんな喜んださ。だから、昔やったこの青年達の石碑建てろつて言つたくらいなんだよ。

### 3 流水客土

一般的には、水田の上田化を図るために山の赤土を溶かして泥水とし、それを従来の用水を使って水田に流し入れる客土の方法。北上川の改修の際に浚渫された土砂を利用することによって行われた。詳しくは、本書37ページを参照。

数回の干拓作業を繰り返すことによって、大沼は徐々に水田として利用しやすいものになった。今では「すつかりきれいになったね」と実感できるほどに美しい田園風景を呈する大沼であるが、その背景には「いろんな苦労があったのさ」ということである。

## ヨシ刈りを始めて

昭和21年からは、副業的にヨシ刈りも始めた。

昼間は暇だから、今度アシガヤ（ヨシ）刈りに入れてもらえねえかなあと思って、ここで組織してる、団体で刈ってる人にお願したの。そしたら、いいんでねえかな、つて誘われてさ、それから農閑期、だから12月から4月まで、共同のカヤ刈りしたわけ。これは終戦後だから、昭和21年ころだったか。それからずっとカヤ刈りするようになったの。

当時のヨシ刈りは、個人で行う作業というよりも、ひとつの船に10人程度が乗り合わせて刈り取り場所まで行き、そこで共同でヨシの刈り取りを行うという形であった。ヨシ刈りを始めた1年目は数名の集団で作業をしていたが、翌年からは個人で作業をするようになった。というのも、あくまでも酪農の傍らで行う作業になるため、農閑期にヨシ刈りだけを専門的にやっている人たちの時間配分とは、必ずしも合わなかったからである。

カヤ刈り、1年だけ共同でやったの。でも、私の家は（酪農の仕事として）40キ口缶（2斗缶）で4本

ぐらい出したからね、毎日。だから、それ搾ってから（酪農の仕事のノルマを終えてから）共同（のカヤ刈り）に行かなきゃいけないから、とつても体が勤まんないから、共同から脱落して、自分でカヤ刈るようになって船には乗られないから、厳しいわけさ、時間に制限があるから。とつてもこれじゃ勤まんないからつて、1年でやめて、自分刈りしたわけさ。個人で刈つて、まあ下請けみたいに1丸（束）なんぼで刈り受けたのね、人夫だから。入札で買ったところを、私たちが刈るわけだ、1丸なんぼつて刈り子したの。それを、それから何年かずーつと、20年ちよつとだね。

ヨシ刈りはあくまでも副業であったというけれども、「この副業でカヤ刈り、一番なんだね」というように、比較的高収入が期待された。

カヤ刈り、刈り取る目的ね、いまみたいにほれ、商売（収入目的）で刈るつてことはなかったのね。でも、とにかくあのカヤ刈りは金にはなったね。（酪農より）よかつたね。半日働いて、やっぱり一般の労働者よりも（金を）とつたんだね、半日で。半日しか仕事してねえんだから。あの潮時、潮が出たら仕事出ねえんだから。あと半日遊んでればいいんだ。いい副業だったんだね。だから私だけでなく、ずいぶん刈り子あつたのね。

潮の満干に合わせて行うヨシ刈りの作業は、潮が満ち水位が高くなるとできない。そのため、一日中できるわけではなく、5〜6時間程度しか作業はできない。したがって、干潮時にヨシを刈り取り、それを船で陸まで運ぶという形で作業を進めていた。作業時間は約半日と制限が



大須生活改善センター  
農村地域定住促進事業として、昭和54年に建設。土地の取得費1千万円は3年分のヨシ採取権でまかなわれた。

あったにもかかわらず、1日30束を目標に刈り取りを行うこともあった。そうすることによって、農閑期に半日で稼ぐことのできる金額は5000円程度であったため、「酪農よりよかった」という記憶が残っているのである。ヨシを刈り取る場所は、地域の業者が入札して権利を持つていた区域である。入札<sup>4</sup>時には、一区画90万円程度(昭和30年前後)の高値がつく区画もあった。

部落の1年の経費を谷地<sup>やち</sup>で賄ったもんだもんね。100万(円)近くなった。大須<sup>おほす</sup>の生活センター(大須生活改善センター)は3年1000万(円)で権利を売って建てた。これは過去の栄光の物語。

今、当時の自分自身の作業を思い出しては、それも「過去の栄光」だと振り返る。

大須谷地のほとんど上の谷地は、私たちだけで刈ったの。あとの下の谷地たちは、別の人が刈ったの。カヤ刈りっていうのは、私、女房もらってからしばらくやったなあ、2人で。私たちは他の人たちの3倍も刈ったので、私たちだけ頼んで刈らされたもんだもんね。結局はね、他の人たちより丸く大きく出すから、ひとまわりなんぼっ

4 ヨシの入札  
建設省(現・国土交通省)の管轄下にあった河川敷に生えるヨシを刈り取るための権利を求めて、各部落ごとの契約講で払い下げを受ける。その後、誰が刈り取るかは契約講ごとに入札が行われた。詳細は、本書15ページを参照。

て言っても、割合いいから、私たちしか頼まれなかったんだねえ。私はそのとき、車の免許持たないから、2人乗りのオートバイ買って、この大須谷地って（北上）大橋の上、全部刈ったのね、私と女房で。釜谷谷地からね、大須谷地、長尾谷地、ほとんど刈ったんだねえ。

カヤ刈りを始めた当初は、もちろんすべて手作業であったが、時代の変化に伴って刈り取り用の機械が出てきた。そして、その後、約20年間に渡って、業者の請負などしながらカヤ刈を続けた。

また、ヤマガヤを刈ったこともある。ヤマカヤ刈りに出かけたのは主に戦前のことで、部落有林のなかで行うことが多かった。

（部落有林には）カヤ（ヤマカヤ＝スキ）の方が多かったの。そいつはただで持つてくるの。部落の山しか刈れねえから。決まってから。奥山はみな部落有林でしょ。国有林でないから。国有林は、手前だった。部落有（林）から刈る。みんな部落、部落で部落有が決まってっから。

### 炭焼きの体験

特に終戦後、この地域で盛んに行われていたのが炭焼きである。主に農閑期の作業として携わっていた人が多い。

終戦になってからいろんなことしたさ。谷多丸<sup>やたまる</sup>ってね、それを借り受けて、ほら、焼きもの頼んで、そ

いつの炭だし、馬飼つて、うちで世話してき。木炭、こっちの隣村、女川つてとこ、あそこ山が良くて、ぴつぴと出したわけだね。馬さだんごつてつけてさ、6俵ずつつけて。炭を馬さつけて。乗つけて。片側に3俵ずつこつ6俵つけて。向こうの沢から山を登つてこえて。(谷多丸の方から)こっちの方へ。2、3年やつたな。

炭焼き用に使う木々は、国有林を営林署から部落に払い下げてもらい、それを部落内で欲しい人が入札して確保する。炭焼きに利用する木は杉が中心で、もっとも高額がついたときには1石20000円程度したという。そして、作つた炭は平田舟を利用して、石巻方面に出荷していた。この炭焼きで稼いだお金が、重要な生活費になっていた。農閑期の作業として炭焼きをする時代は、約20年間続いた。

## 地域一の養蚕経営

1年の作業のサイクルは、概ね、5月から農作業をはじめ、5月末に田植えを終えた後、養蚕、7月にはヨシ扱き<sup>こ</sup>、9月には再び養蚕、10月に稲刈りと脱穀、11月に麦を蒔き、12月に炭焼き、そしてお正月を迎えて、主な作業としてヨシ刈りをしながら冬の野菜作りや堆肥取りを行う、という流れであった。その中で、年2回行つていた養蚕は、ヨシ扱き、炭焼きと合わせて、生活費を稼ぐために欠かすことのできない重要な仕事である。

うちでなんぼか生活の足しになつてたのは、蚕<sup>かいこ</sup>つてやつてたのね。んだけども、その蚕は、春と秋にし

### 5 営林署

石巻営林署(現・宮城県北部森林管理署)。営林局の指導、監督を受け、主に国有林の保護、管理についての事業を実行する。

### 6 ヨシ扱き

夏期に刈り取つたヨシの穂先の部分を海苔簾として使用するために、青い葉の部分を削ぎ落とす作業。本書13ページまたは23ページを参照。

かないからね。お盆過ぎて蚕をやつて。その季節にね。蚕は長かったね。うちのお父さん、今の五郎（娘婿）がここに来てからもね、1年か2年ぐらいやつたかね。

養蚕をしていた当時、家に「養蚕部屋」を作っていたのだが、その名残として今も千葉信男さんの家は中二階構造になっている。さらに、千葉家は集落一の養蚕を営んでおり、集落の中で最後まで養蚕を行っていた。

構成／武中桂

## 大沼

女川集落おなわに美しい水田が広がる三角地「大沼」がある。今や集落を象徴する「美しい田園風景」となり、女川集落の人びとはもとより、北上町内のその他の集落の人びとも利用されている。

この大沼は、古くから周辺地域の人々に利用されており、その始まりは大正時代に遡る<sup>1</sup>。大正3年（1914）ごろ、平塚喜一郎氏（石巻市）が、官有地であった大沼やその近隣の民有地を買収し、北上川河川改修工事の排砂を埋立てに利用、水田開発に着手した。しかし、種々の都合により大正4年、その所有権は山川清氏（石巻市）に移った。その後、山川氏は大沼の周辺に家屋や馬小屋を建築し、開拓者を募り、本格的な水田開発に乗り出した。その結果、昭和元年ごろには水田面積が約20町にまで広がった。順調にみえた山川氏による大沼の開発であったが、収支の折り合いがつかないことから、昭和13年にその権利を渡辺正市郎氏（仙台市）に譲渡した。だが、渡辺氏による干拓事業の中で数々の問題が生じたため、所有権は渡辺氏のまま、水利権のみを佐々木松之助（旧津山町）に譲渡した。その後、昭和18年（1943）には村（当時の橋浦村）が所有権・水利権を買収したことによって「地主・小作」関係が撤廃され、開拓開始からおよそ30年を経て、農民のものとして解放された。そして、昭和20年、橋浦村と三井物産との間で大沼開拓の契約が成立し、三井物産が工事を代行する形で本格的な水田造成が始まった。

終戦を迎えたとき、その干拓工事はやむなく中止を強いられたが、その一方で昭和18年に住民たちの間で「大沼耕作者組合」が結成された。さらに、終戦後の昭和21〜22年にかけて、利用者们自身によって自主的な土地改良や埋立ての整理など、小規模な造成事業が続けられていた。

1 以下、大沼開拓の変遷については『北上町百年の概要』（1975年）を参照して記述したものである。

その当時のことについて、千葉信男さんは次のように語っている。

「個人的に深いところさ、自分で手労働で埋めたり、都合よくトロッコを借りてた人もあるしき。トロッコで埋め立てて、トロッコで線路敷いてほら。もう昔はトロッコってね、レールに走ってあつから。そこに二丁谷地<sup>にちようやち</sup>って部落ある、あそこに大きな砂山あつたのね。北上川の砂さ、ここさ掘り出すのに。昔さ、河川改修してさ、ここさ砂を置いて。大した砂があつたわけよ。」(千葉信男さん・追波在住)

ただし、何の準備作業もなく簡単にトロッコを走らせる線路を敷くことができたわけではない。後で記すように、当時、大沼内には「浮き谷地<sup>2</sup>」と称される部分があつたため、その浮いた谷地を沼の底に埋没させる作業から始めなければいけなかつた。浮き谷地を沈めるために使用したのは、製材所から廃材として出る杉の板である。その杉の板を何枚も集めて、それらを束ねたもので浮き谷地を沈める。足元の浮き谷地<sup>やち</sup>を埋めては線路を延ばし、また一歩進んだ先でも浮き谷地を埋めては線路を延ばし、といった具合に徐々に線路を延ばして、トロッコを走らせた。この作業に携わつた佐々木初男さんは、次のように語る。

「私もトロッコ押したんだけどね、浮き谷地だから、トロッコの線路敷くのもね、大変なんですよ。ちょうどそのころ、杉の木を製材している人がいたから、切つた杉の板いっぱいあるわけ。杉の板ね、集めて、ただだから、こいつを丸つてね、ずーつと長いから。そいつを浮き谷地の上き置いて、そしてその上き線路を。そして徐々に線路を延

## 2 浮き谷地

浮き谷地の厚さは30センチメートルから60センチメートル程度で、場所によつてその厚さは異なる。浮き谷地の下は冷水の層になっており、その層の下が地盤となつていた(『北上町百年の概要』1975年)。



(大野家歴史民俗資料館所蔵・登米市)

スッポウ

ばしていったのね。浮き谷地<sup>やち</sup>だから、線路をただ置くわけにもいかないから。そうでないと、トロッコ沈んでしまうから。」(佐々木初男さん・女川在住)

このような作業は昭和21〜22年ごろに着手された。その後、昭和28年には役場内に「大沼土地改良部」が作られ、昭和33年には北上村と大沼耕作者組合によって、第一回流水客土<sup>3</sup>が実施された。ここに、本格的な大沼の干拓事業が始まったのである。昭和34年には大沼耕作者組合が解散して「大沼土地改良区」となり、灌漑排水工事が実施されるなどして、昭和47年に再び流水客土<sup>3</sup>が実施された。その結果、約64町歩の水田が完成したのである。

以上のような変遷を経て、「水田としての大沼」が姿を現したのであるが、干拓前は必ずしも水田として利用されているだけではなかった。干拓前の大沼は名称の通り「沼」であり、その大部分は水面であった。そのため、「ああ、魚は良かったねえ」(佐々木初男さん)というように、たとえば漁撈の場としても近隣に住む人々に利用されていた。ミミズを餌に竹ざおを使用して船釣<sup>4</sup>りを行ったり、竹籠を利用して魚を獲ったりしていたが、特に水鉄砲の原理を利用した魚獲りのための道具・スッポウが便利な道具だったそうである。獲れる魚は、フナ(マブナ、ヘラブナ)、ナマズ、

3 流水客土  
本書53ページを参照。

カジカ、ウグイなどが大半だったが、中でもカワエビがよく獲れたそうである。

「大沼のエビってね、エビいっぱいいたんだね。今は絶滅したけど、昔はエビ。それをエビだも朝、掬すくいに行くとな、大っきな大っきなこーんなざるでね、お昼前に1つぐらい掬すくってきたもん。そいつを煮たり、塩辛、エビ塩辛しんって塩辛しんにするとおいしんだねえ。殻が柔らかえからねえ、柔らかいんだもん、カワエビってのは。皮は湯かけて、塩絡めにして。大好物だったのね。エビ塩辛しんって、これも絶品。売りに行った人もあったのね。天ぷらか何かに加工して、いろんなお祭りとか、いろんなとこさ店出してさ。」  
(千葉信男さん)

人々は自家消費用にこれらの魚を利用し、日常に食する以外にも、一冬に獲った小魚を続つく一年の調理用出汁だしとして確保したりもしていた。また、大沼で獲った魚やエビを津山集落つやまや横山集落よこやまなどの山里にある集落まで売りに行くこともあった。このような大沼での副次的な漁撈りょうに関しては、「誰が行つてもよかったの」(佐々木初男さん・千葉信男さん)というように女川集落おながわの住民であるか否かに関係なく誰でも利用することができた。

このように、人々が魚獲りをしていた当時、大沼の縁部には、見渡す限りヨシやマコモ<sup>4</sup>を中心としたカヤが生い茂っていた。このカヤの利用について特に制限はなかったが、主として近隣に住む女川集落の人々が、それを家畜用に利用していた。

「ヨシやマコモ。結局、女川部落の人さ、馬の草に草刈りしたもんださ。結局、家畜

#### 4 マコモ

北海道から九州、東アジアから東南アジアに分布する大型の多年生草本。ため池の湖岸、沼沢地、流れの緩やかな河川などに生育し、草丈は1・5 mを越える。

の餌に刈っていったわけだ。無料で刈っていったわけだね。」(千葉信男さん)

また、干拓前から「水田」としての利用もあった。ただし、水田と言っても干拓後の現在のよ  
うな形態とはまったく異なり、いわゆる「浮き谷地<sup>やち</sup>」を利用した水田であった。

「浮き谷地だからね、とにかく。雨降つと、水位高くなるんで、ポンと抜けて流れ  
ていく。流れていくから、今度は杭を刺して押さえておくんだね。浮き谷地つつうのは、  
歩くと波打つんだわ、浮き谷地もあるし、深いところも、浅いところも。深いところは、  
腰、ちよつと入ってね、田んぼを耕すのにドウラン、はちまきして頭さ挿してね、身体  
こう、前さ動かすんだね。」(佐々木初男さん)

大沼の深さは一定ではなく、深いところになると腰まで浸かるほどであった。そのため、身動  
きさえ簡単に取れず、田植えなどの作業を一つするにも並々ならぬ体力が必要だった。さらに、  
「流れ新田」とも呼ばれるように、浮き谷地を利用した水田は、風雨によつて流されることがある。  
そのため、人々は竹などで杭を刺して水田が流されないように工夫をしていた。というのも、せつ  
かく苦勞しておこなった作業の数々が無駄になってしまっただけでなく「浮き谷地」は流れてしまっ  
た時点で、流れ着いた場所の小作権を持つものの水田へと変わってしまうからである。

「結局、よそさ流れたものは、自分のものでなくなってしまうのさ。流れ着いた土地  
の人の、みんな肥料になってしまうのさ。だから、みんな流れないように工夫したんだ

もんね。竹を刺したり、そうやって押さえたんだよね。私の田んぼも流れたことあんだけど、結局ほら、そこさ行つて今度は魚釣りしたんだ。田んぼ流れた後、そこさ魚いっぱいいるから。」(千葉信男さん)

しかし一方で、人々は水田が流れてしまった跡地には多くの魚がいることを知っていたため、不幸中の幸いとしてもいべきか、浮き谷地が流されてしまった場合には、漁撈で副次的に収入を得ていた。

昭和47年の流水客土を終えて以来、今日に至るまで大沼は「水田」としてのみ利用されている。その利用者は女川集落の人々が中心であるが、十三浜(じゅうさんはいま)(特に吉浜集落よしはま、追波集落おつば)などに暮らす利用者もいる。現在の利用戸数は約150戸であり、「大沼利水組合」(組合長・千葉五郎氏)がその維持管理を担っている。

四季折々の顔を見せる大沼は、女川集落だけに限らず、今や北上町を代表する美しい田園風景となり、多くの人々の目を楽しませている。それと同時に、そこにかねてからかかわってきた人々にとって、大沼は、自分たちの記憶の源泉にもなっている。

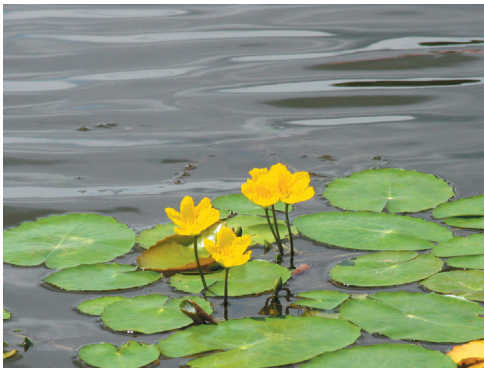
文／武中桂



現在の大沼

## 北上川水系皿貝川とは

皿貝川は、河北町の大峰山（404メートル）から流れ出す。河北町皿貝を通り、北上川左岸を並行して流れ、月浜第一水門を経て北上川に合流する一級河川である。流域面積は約32平方キロメートル、河川延長は約10・5キロメートルに及ぶ。北上川の支流としてはほかに、長尾地区を流れる西沢川、女川地区を流れる大沢川、追波地区を流れる追波沢川があり、いずれも皿貝川同様、流域の水田の灌漑用水として利用されてきた。皿貝川の河水は、約106ヘクタールの耕地を潤し、その取水量は最大で毎秒0・387平方メートルになる。将来的には、北上川からの灌漑用水に切り替えられる計画である。皿貝川の周辺は、土地改良区域（皿貝川沿岸土地改良区管理組合）だった。皿貝川自体には水利権もなく、流域の住民がその水を勝手にくみ上げてもとくに問題はなかったという。川近くに住む人々は、蛇腹<sup>じやばく</sup>やスッポウで水をくみ上げ、水田に利用していた。



皿貝川のアサザ

さらかがわ  
皿貝川  
コラム

### 1 大沢川

女川の人々にとつて身近である大沢川は、月浜第二水門を経て北上川に合流する、流域面積約25平方キロメートル、河川延長約7キロメートルの一級河川である。

### 2 蛇腹

揚水機具のこと。川の水を田に汲み上げる足踏み式の水車。自分の体重をかけて回転させ、水を汲み取って柵に受け、田に流し入れる。素材として、水に入っても腐りにくい材質の木が使われていた。

水面には、浮葉植物群落としてアサザ群落、ヒシ群落があり、とくにヒシ群落は広い面積を占めている<sup>3</sup>。ヒシは食用にもなる。水際にはヨシ群落や樹高の低いケヤキ・オニグルミ・ハンノキ・ヤナギ類が繁茂し、他にサギ類・カモ類などの水辺の鳥類、フナやコイ、ウグイといった魚類<sup>4</sup>、さらにカエルやトンボの姿もよく見ることができ、並走する大河・北上川とは、また趣の異なった静かな流れとなっている。

しかし、皿貝川の歴史を紐解いてみると、その一見静かな川が、毎年のように暴れ回ることで、流域の住民が苦闘を重ねてきたことがわかる。皿貝川の沿岸は、山地と北上川堤防に挟まれた低平地が多く、地盤の高さが河口潮位よりも低いために、北上川の水位が上昇すると自然排水が困難になってしまう地勢にある。

## 荒ぶる皿貝川と治水の歴史

皿貝川では、昭和23年（1948）からの河川改修で現在の堤防がつくられ、内水を抜くための排水装置が設置されたり、コンクリートによる三面張りの護岸が作られた。ところが、左岸側の改修に比べ、右岸側の改修が遅れているため、右岸側の堤防が左岸側よりも低くなり、堤防高が不足していた。そうした状況のなかで、頻繁に水害が発生してきた。昭和8年生まれの山内章さん（本地<sup>ほんち</sup>在住）は、昭和33年ごろ、台風の大水で皿貝川の堤防が決壊したことをよく覚えてい。自宅の前あたりまで、道路の膝丈くらいまで水が来てしまった。

近年ではとくに平成14年（2002）に、被害区域が263ヘクタールという大きな災害が発生している。大雨などで増水した皿貝川の水が北上川に排水できず流域の耕地に溢れ出すこの「内

3

大沢川のところでろには小さなアサザ群落が見られ、県内でもっとも規模が大きいものとされる。

4

近年はブラックバスの増加も指摘されている。

水問題」に、皿貝川流域の人々は毎年のように苦しめられてきたのである。

北上川では明治43年（1911）から昭和9年（1934）まで大規模な河川改修工事がおこなわれた。その結果、岩手県からの水が直接来るようになったが、大水や満潮時になると堤防の内側に内水がたまり、排除できなくなるのが「内水問題」であった。この大規模な河川改修工事によって、昭和3年、皿貝川と北上川の合流点に現在の月浜第一水門が完成した。おもに洪水時の北上川から皿貝川への逆流防止と塩水の遡上防止を目的としたものであった。だが、この水門の完成にもかかわらず皿貝川の治水問題は解決しなかった。昭和9年から昭和10年にかけて、皿貝川の改修問題について旧橋浦村の関係者が何度も仙台へ赴き、県への陳情や交渉をおこなっている様子が記録に残っている。北上川の改修工事によって旧飯野川村、旧橋浦村、旧十三浜村がとくに大きな被害を被ることとなった、いわゆる「追波三村悪水被害」問題である。

皿貝川の排水改良工事は、流域に暮らす人々にとって長年の懸案だった。

## 記憶の中の皿貝川

歴史からは、暴れ続けてきた皿貝川と、その治水の歴史が読み取れる。しかし、人々が語るかつての皿貝川の姿と、それぞれの個人的な記憶からは、皿貝川が持つまったく別の表情が浮かび上がってくる。皿貝川は、付近に住む人々にとって、漁とも遊びともつかない、貴重かつ身近な「魚とり」の場であった。

大正12年（1923）生まれの武山武志さん（女川在住）によれば、皿貝川でコイ、フナ、ナマズ、ウナギ、ドジョウを獲っていたという。いずれも、家族で食べる程度の量だった。大正14

### 5 月浜第一水門

2006年3月、老朽化が著しい水門の約90メートル上流に3門の水門が築造された。

### 6 追波三村悪水被害

『北上町史 通史編』  
第三部第二章に詳しい。

年生まれの千葉信男さん（追波在住）は、魚が驚くほど大量に釣れたころを懐かしく思い出す。

「昔はね、小魚が本当豊富だったの。このほら、小っちゃいような前の川さ行くどね、このようなバケツに1つぐらい釣れるんだよ。おもしろいくらい釣れたのね。秋になるとね。ウゴイツつんだ。ウゴイ。あれが大量つて釣れたのね。昔の海苔30缶。30缶ぐらいつていったら、船1艘くらい釣れたんだもんね。だから仙台からあっちのほうからなんだの釣の人さ押し寄せたもんどもん。船いっぱい並ぶんだよ。この川ん中さ。大川（北上川）も、この川も、日本一の釣り場つて言つてたんだね。魚は豊富だったのね。川幅は今の半分しかなかったけどね、本当魚豊富だったのね。いろんな魚の産卵場所だったからね、もうみんな産卵するために上つてくんた。だからこの魚をとるために、宮城県のほとんどの所から釣りに来たもん。うちで宿して泊めた時も、一晩で十人以上泊めたこともある。釣り宿するもんでね。どっさり釣つてくんたもん。釣つた魚は、焼いて持つてくわけだ。今みたいに冷凍して持つてくんじゃなくて、出汁<sup>だし</sup>、出汁魚だね。お雑煮の出汁どかに使つてるわけだ。」

本地集落<sup>ほんち</sup>に暮らす山内章さんは、皿貝川で地引網が張られていたころの風景についてこう語る。

「皿貝川でね、地引網つて網ね、あいつかけたら、コイだとかね、今はいなくなつたけどマブナ。鱗が金色して光っているやつ。今はヘラブナで白いが、マブナつて金色したのでね。きれいなフナだったんだ。あそこの川でもとれたんだね。（地引網は）

時期的に11月から3、4月くらいまで。水が冷たくて、魚が遊び歩かない時期にやっていたんだ。川の片側だけで人手が3、4人いるから頻繁にはできない。コイやナマズやマブナ、1回で20貫（70〜80キロ）ぐらい取れたんだね。魚が欲しかったら地引網を応援して、魚をもらうために藁でつくったカマスを背負って運んだんだ。」

春先にはウナギも、竹に針をかけた仕掛けを使って捕っていた。牛乳瓶くらいの太さのウナギで、前の日に針に餌をかけて、糸を2メートルくらいの竹に結んで、皿貝川の10メートルおきくらいに20〜30本ほど仕掛けておく。すると翌朝、たいてい5、6本にはウナギがかかっているという寸法だった。仕掛ける場所は早い者勝ちで、川の真ん中に仕掛ける人は舟を使っていた。この仕掛けでウナギのほかにナマズもかかったという。

昭和21年生まれの手葉宏一さん（追波在住）にとつて魚とりは、子どもころ集団遊びをしてきたときの思い出だ。

「学校から帰ってきてはすぐ手伝いでしたからねえ。でも、遊びましたね。違う年齢の子供たちで集団で遊んでねえ。いいことも悪いことも先輩たちから学んだことが多かったねえ。喧嘩の成敗もされたりね。悪いことするときも親分が率先してね、芋を掘ったり、干し柿をとったりしました。川でもよく遊んでね、皿貝でも沢（大沢川）でも。今は汚いけど、昔はきれいでねえ。アカハラとか、名前はよくわかんないけど、エビとか、フナから、カジカ（ハゼ）とかね。大沼ではあまりとらなかつたねえ。北上川にも行かないことはなかつたけど、あんまり行かなかつた。」

千葉信男さんはまた、魚とりと並んで、シジミが獲り放題であったと話す。

「まあ小さいころはこの川で、水遊び、泳ぎだねえ。今みたいに、学校でプールなんかねえんだもん。どこでもいいの。遊泳禁止なんてないんだもん。それで、事故起きないのね、事故も起きないんだよ。全然起きないの。そして夏あたりはほとんどやっぱりシジミ掻きしたんだね。結局、泳ぎながらシジミ掻きしてしゃ、小さいのは掻かないんだわ。そうだから桶を持っていくわけだ。昔は桶だから、一杯シジミ掻いてたんだわ。だから、この内川（皿貝川）でシジミ掻けんだもんねえ。どっさり掻けるんだもん。」

皿貝川はまた、魚を釣ったり獲ったりするだけの場所ではなく、人々の暮らしの中でさまざま  
な表情を見せる身近な「水」であった。千葉信男さんは次のように表現する。

「昔は家で米とがないで、川でといたもんね。この前の川で、みんな川で米とぎして、そうすつと小魚が、濁り水に、こいつがザルで掬えるくれえ上がってくんだったちゃ。ウワーっつと色つくんだわ。それくらい豊富だったの、とにかく川が、それが飲むよ  
うな水だから、きれいな水だから、魚も棲んだんだ。本当、豊富にいたんだべねえ。  
昔はとる人も少ねえつから。」

武山武志さんも、昭和のはじめのころはきれいな川で、川の水で米をといだことを覚えていて、小さい栈橋が各家にあつて、川岸で米をといでいた。またそのころは、家庭からの雑排水も肥料として大事にした。「シシナダメ」という台所の下水を貯めるところに、生ごみなどもまとめて入れ、それを腐敗させてから肥料として畑にまいた。

昭和3年生まれの佐々木初男さん（女川在住）は、皿貝川さらかいがわに沿って歩いて学校に通った。冬になると、皿貝川にも氷が張った。佐々木初男さんたちはその上を滑って近道をしたが、その氷の厚さはかなりのものだったという。真冬には、皿貝川の上を馬車が通うほどだった。

本地集落の山内章さんは、皿貝川で開かれた小学校のスケート大会のことを覚えている。

「皿貝川は全面的に人が渡って歩けたから、そこでスケートね。針金を、カスガイっていうんだけど、それをちよつと曲げてね…そいつの大会があつたんですが。スケート大会。何十人も集まって、その氷の上にも、氷割れねえけえ厚いんだよ。もつと昔は寒かつたからさあ。だいたい20センチ以上厚みあつたよね、氷。」

昭和36年生まれの今野照夫さん（本地在住）も、幼少のころの皿貝川に思いを馳せる。

「北上川じゃなくて、こつちの川（皿貝川）で遊んでました。いやあ、きれいな川でしたからね。あの、シジミもいたし、カラスガイもいたし、藻がなかつたんですよ。塩が入っていて、たぶん、よかつたんじゃないですかね。今はドブだけど。だつて足を入れても底まで見えたからね。深さも1メートル50くらいはあつても見えたく

らいですから、相当きれいだったんじやないかなあ。周りにはコモクサ（水草）が生えてたね。マコモともいうのかな。釣りもしましたね。ハゼは釣ったなあ。なんでこんなに釣れるんだろってぐらい。1日500匹以上釣ったもんなあ。2回家に運んだもん。午前中に1回、午後後に1回。出汁だしにしたな。近くの人にも配ったりね。それだけ環境がよかつただべな。」

しかし、これらの皿貝川にまつわる人々の思い出は、あくまで過去のものである。「キレイだった」「魚がたくさん獲れた」と述懐するが、現在の皿貝川を見つめる人びとの視線は、昔とは大きく違ったものとなっている。

### 皿貝川の現在 / 変わりゆく皿貝川

では、人々の記憶のなかで皿貝川は、いつその姿を大きく変えたのだろうか。武山武志さんは、「戦前と戦後で大きく変わった」と振り返る。透き通っていた水は、いつしか茶褐色に濁った。「赤くてドロドロした水になってしまった」ことの原因について、武山武志さんは、急な開発によって生活が一変したのと無関係ではないと考えている。

山水を水道で引くようになり、水が豊富になって、台所で下水機能を果たしていたシシナダメに溜めるには多すぎるので、そのまま下水に流すようになった。下水が流れていくのが皿貝川であり、地下浸透もあって、どんどん汚れていく。また皿貝川は、もともとはもつと川幅が狭く、水深が深かった。しかし今は海面との関係で、落差をつけるために川底を掘からずに堤防の嵩かさを高

くしている。そして川底がどんどん上ってきていることから、川が昔果たしていた機能が果たせなくなっているのではないかというのが、武山武志さんの推論だ。その背景には、昔に比べ水が流れなくなってしまうという認識がある。山のほうの沢には、涸れてしまっていてくるものも多い。それは、山が雑木から杉林の植林へと変わり、保水力がなくなってきたからだ。いつも葉をつけている杉が水を吸い上げ発散させてしまい、沢に水が流れないのではないか。杉の植林の歴史との関連を、武山さんは危惧している。

皿貝川まきがわの改修工事は、道路改良も合わせて追波水門おつばのほうから水を一定区間せき止めて、スコップで川底を掘った。その泥を、女性がモッコに背負って上げていた。毎年、予算の範囲内で次々と上流のほうまで行った。本地集落ほんちの山内章さんによれば、工事の後、泥を全部取ったため、川はきれいになったが、その後だんだんと汚くなってしまったという。

水が汚くなったという感覚は、人々を川から遠ざける。山内章さんは、川で年長者が小さな子どもに泳ぎを教えながら一緒に遊んでいたことをよく覚えていて、「戦後、バイ菌がいるから川で水泳するな、というようになってきてしまった」と回顧する。冬に張る氷も、かなり薄くなった。終戦ころまでは歩いて渡れたが、いつしかもう渡れないくらい薄くなってしまった。今は川の周りに草（ヨシ・コモクサなど）が生い茂ってなかなか川にも近寄れなくなった。

戦前には、地域の人人々が、誰に頼まれることもなく、夏に水の中に入って、草を鎌で全部刈って、共同で川掃除をしていたという。なんとなく昔ながらの風習というか慣わしのようなものだったが、生活は厳しくとも、共同作業は固く、しっかりと行われていた。しかしこの川掃除も、戦後に数回あった後、特に何が原因ということもなく自然と行われなくなった。「今はもう魚も捕らないし、川と山のことには誰も考えてないんじゃないかな…」と、山内章さんは現在を表現する。

本コラムは、『河北新報』、『北上町史自然生活編』（北上町史編纂委員会 2004 北上町）、『二級河川北上水系北上川（一）流域河川整備計画』（宮城県 2003 年）、『北上川維持邑域編入皿貝川改修問題経過』（宮城県桃生郡橋浦村役場

---

---

ただ、今野照夫さんが、昭和40年代の皿貝川について活き活きと語るように、皿貝川が、いつどのように変わったかについてはさまざまな認識や語りがある。

文／黒田暁



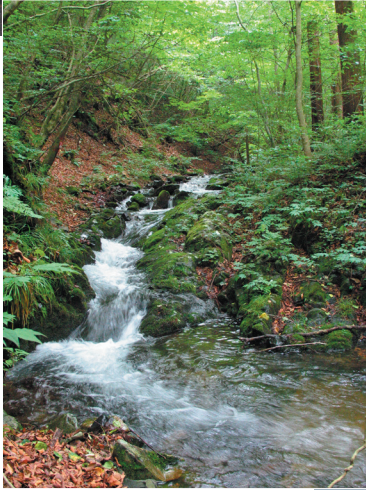
現在の皿貝川

---

1935年）を参考にして記述した。



# 山の章



佐々木初男さん

「夜、提灯を点けて栗拾いに行つたものです」



昭和3年（1928）、女川おながわに生まれる。昭和36年3月より平成元年（1989）3月まで北上町役場勤務。女川在住。

### 生い立ち

昭和3年に、女川のこの家で生まれました。私の名前は、佐々木初男といいますが、初めて男の子が生まれたということで、親父が「初男」と付けました。

親父が内務省の関係の仕事をしていました。親父は、その仕事で岩手県の宮古市へ派遣されて、向こうで6年くらい働いていました。昭和8年の三陸大地震のときには山へ逃げて一晩中津波の様子を見ていました。小学校2年生のときに妹が生まれたのをきっかけに、女川おながわに家族で帰ってきました。

昭和18年、徴用され、産業戦士ということで、東京・品川の軍需工場（日本特殊工業株式会社）へ行つて、終戦まで過ごしました。工場では、濾水機を作っていました。

昭和19年に父親が亡くなりました。父親は、蓄えたお金で田んぼを4反買っていました。行人前きょうぜんの田んぼでした。戦後私は、その田んぼと炭焼きをやりました。

## 山分け

女川ではほとんどみな炭焼きをやっていました。

窯は全部現場に作ってやりました。毎年国有林の払い下げがありますから。営林署の方で、ここからここまで払い下げしますよ、という形でした。払い下げを受けた場所を「山分け」して炭焼きしました。そこに窯を作り、通いました。

120人くらいが参加して山分けをしました。山分けというのは、大分けがあつて、小分けがあります。営林署から払い下げられた山を、まず大分けします。そうすると、その「大分けの一番に何人入る？」とみんなで決めるわけです。30人なら30人と決めます。それぞれ大分けしたものに誰が入るかは、「ノゾミ(望み)」と言つて、希望をとります。「誰が入る？」と聞いて、みんなで走つていきます。30人なら30人になったらそこで切ります。早い者勝ちでした。大分けした中を、今度は小分けします。

小分けというのは、まず、みんなで上から下まで間隔とつて2列に並ぶわけです。左右2人と上下2人の4人の間にどのくらい木があるか、炭に焼いたときにどのくらいの量になるかをはかります。炭に焼いた場合、こちちからこちちまで5俵、こちちからこちちまで7俵、こちちからこちちの細かいのを合わせて30俵くらい出る、と。1窯30俵が基準なので、「ここからこちちまでオラんところは1窯分あるぞ、そこからこちちまではいくらある?」「オラんところは1窯半だなあ」と言い合います。それを上から下までやります。

そして100俵ずつ分けるとすると、たとえばあるところは80俵分しかない。そんなときは残り20俵分を別のところから加えます。「はい、これで一本クジ」としました。一人前のことを「一本クジ」と言ったのです。

そうやって分け方が決まったら、今度は印を付けなければなりません。木番きばんといつて、木の根っこ部分、土とすれすれのところを、ナタで削るのです。一つ傷つけて、「はい、一番」と。それが「一番の木番」となります。こんどは二つナタで削って「二番の木番」。同じように「三番の木番、……」としていきます。「ここは雑木が多くていい炭ができない木が多いから、もう少し足してやれよ」とか言いながら、印を付けていきます。「木だね」といって木の種類が違いますから。「十番」になると、今度は大きな傷をつけます。十一番は、十番の大きな傷と一つの傷で十一番。そうやって山を分けていったのです。

全部終わったところで、今度はくじ引きをして、誰がどの木をもらうかを決めます。組合長が紙を切ったものに番号を書いて持ってきていて、それを折って帽子に入れて、歩いて順番に渡していきました。

めったになかったけれど、中には、気に入らない番号だったりすると、投げてしまう人もいました。みんな同じように分けたつもりでも、みんな見る目が違いますから。

山分けは1年に1回秋に山の現場でやっていました。炭焼きはそのあと冬に行いました。冬の仕事なのですが、一年中焼きたい人は、炭を焼かない人もいるので、その人から権利を買います。「2本クジ買ったから全部で3本クジで、来年の山分けまでやる」と言つてやるわけです。

組合に入っていないと山分けには参加できません。権利だったのです。「村加盟」といって、「村に加盟させてください」とお願いをしなければならなかったのです。村加盟とは契約講に入ることです。規則にはなかったと思うのだけれど、村に入るためには村に貢献しなければならぬ、ということがありました。貢献度が低いと駄目だったのです。

八十一人持ちや一四一人持ち」は、国有林とは別の組織になりましたが、山分けは同じようにやりました。

小学校のとき、土曜日に学校から早く帰ってくると、親父を手伝って、炭を背負<sup>しよ</sup>って、山から道路まで運び出していました。4年生になると、学校でも生徒全員で炭を背負う仕事をして、運搬賃をもらい、そのお金で学校では拡声器を買ったのです。当時としては珍しく拡声器を買って職員室の前に付けて、ラジオ体操をするのにその拡声器を使ったのです。拡声器もいいもんだなあ、と思いました。

## ヤマカヤ刈り

昔は、屋根を葺くのに、ヨシが高かったので、ヤマカヤ（ススキのこと）を混ぜて使ったらしいです。そういう話を聞いています。炭焼きのころは、炭を運ぶ炭<sup>すみすじ</sup>双子によくヤマカヤを使いました。

ヤマカヤはどこでとつてもかまわない。このあたりでカヤ刈りという<sup>やたまる</sup>と、谷多丸<sup>やたまる</sup>ついでとつても多かったです。遠いけれど一ヶ所<sup>おいわけ</sup>で採集できるから、ほとんど谷多丸に行きました。追分<sup>おいわけ</sup>へ行く途中のちよつと手前の戸倉<sup>とくら</sup>というところへも行きました。戸倉の奥の方なんですけれど、一ヶ所木が生えないでカヤがたくさん生えているところがあつたのです。そういうところをカヤシロと言います。「あ



炭双子  
写真は追分温泉にあるもの

1八十一人持ち・一四一人持ち  
集落が山を共有するときの形態。「八十一人持ち」は、81人の地域住民が連名でその山の土地を登記している。

そのカヤシロさ行けば（カヤガ）あつき」というような言い方をしていたのです。なんでだろうなあ、カヤシロにはあんまり雑木が生えてない。今は杉を植林していますが。今はそういうカヤシロはなくなつたかねえ。

自分がヤマカヤをとつてきていたのは、主に炭<sup>すす</sup>双子<sup>ごふし</sup>用<sup>もち</sup>でした。

女川<sup>おながわ</sup>へはよそからは入つてこないけれど（炭<sup>すす</sup>双子<sup>ごふし</sup>づくりが盛んだつたのは女川なので、女川の人たちは、今の河北<sup>かほく</sup>町<sup>まち</sup>だとか、人の領分までカヤ刈りに行つたのです。勝手に行つて、誰にも来るなど言われませんでした。しかし、いちばん多かったのはやはり谷<sup>や</sup>多<sup>た</sup>丸<sup>まる</sup>でした。谷<sup>や</sup>多<sup>た</sup>丸<sup>まる</sup>までは歩いて45分くらいでした。

弁当を持って朝行つて、鎌で刈り、夕方背<sup>し</sup>負<sup>よ</sup>つて帰つたのです。相当な量でした。普通は木炭なら3俵ぐらい、体格のいい人だと4俵ぐらい背負つて帰りました。背中に付ける、わら細工で作つたバンドウ<sup>2</sup>という道具で運びました。

だいたい秋に刈りに行つていました。春に炭焼きする人は、青カヤも刈りました。

3束持つて帰つて、炭<sup>すす</sup>双子<sup>ごふし</sup>は30枚から40枚くらいできました。ありつたけ背負えば、いいカヤだと40枚か50枚できました。いいカヤというのは太くて長いカヤです。

カヤは、3つの束にして、藁<sup>わら</sup>で作つたロープを使つて固定し、下がらないようにして背負つて帰りました。ですから、炭焼きのときは、毎晩縄なえをしました。炭<sup>すす</sup>双子<sup>ごふし</sup>用の縄なえもありますし、バンドウの縄なえもあつて、縄なえはたいへんでした。山から帰つてくると、夜みんな縄なえをしたものです。子どもたちも、縄なえをちゃんとしないと、遊びに行けませんでした。誰かが遊びに来て、まだ縄なえが終わつてないときなど、みんなで縄なえを手伝つて早く終わらせてから遊びに出かけるといこともあつたね。

## 2 バンドウ

藁<sup>わら</sup>で編み、背中に當<sup>あ</sup>つて荷物を運ぶための道具。胴。

## 炭の検査と販売

炭を焼いた場合、今度は検査というのがあります。検査員は県から委嘱されていました。検査は、規格に当てはまっているかどうか、硬さと樹種、目方を調べるのです。どの木の炭かは、見れば分かります。炭としていけばいいのはクヌギ、ナラ。木が硬ければ硬いほどいいですね。検査には、規格というのがあって、何センチから何センチまでは「マルズミ（丸炭）」、でっかい原木を割ってから炭にしたものは「ワリズミ（割り炭）」と言ったのです。そいつの中に今度は、硬さで上・中・下がありました。松が一番安いです。松は炭にすると、ぽんぽんと軽いですよ。そうやって検査して「丸の上」とか「割の上」とか「炭札」を細い針金で付けました。

ずるい人は1つの炭双子の中に別の樹種の炭を混ぜておく人もいてね、検査する人は「炭検査は人検査だ」と言っていたね。

検査をしたあと、検査の場所に業者が買いにきました。当時、石巻あたりからも来たし、町内にも業者が2人も3人もいた。その他に農協も扱っていたんですね。払い下げで山を買うとき、農協から融資をしてもらうから、それを返すためと、農協を通して販売してもらうために、農協が出したんです。払い下げで国有林の権利を買うときは、1本クジで2000円くらいでした。私がやめた当時でね。それを他の人から買うときには1万円くらいになったのです。

売るのは個人個人でした。でも、終戦直後は品物が少ないからね、炭は統制品<sup>3</sup>だったので、闇で売ると警察に呼ばれたりしたね。私も1回だけ、「炭を売ってくれ」と来た人がいて、売ったら、買っていった人は、途中で警察にとつかまってるね。それで私も石巻の警察署に1回行ったことがあるけれど、「しょうがないなあ、でも泥棒したわけでもないからね。まあ今はまだ統制品だから、以後気をつけてください

### 3 統制品

昭和13年（1938）の国家総動員法により米や炭などの日常生活必需品は国家の統制のもとに置かれることになったが、戦後もGHQの意向により統制は続いた。

よ」と言われて帰りました。

私は、炭焼きは昭和36年3月までやりました。やめたのは早いほうでした。遅い人でも昭和40年までやったかやらなかったかでしよう。このころ出稼ぎが盛んになって、みな炭焼きをやめたのです。そのころじゃないかなあ、新幹線か何か工事がいろいろ出てきて。炭焼きより賃金がいいから、出稼ぎへ、というわけです。

私もそのころ役場に勤めはじめたのです。当時女川おんながわから若い一人の役場職員がいたんだけど、その人がお婿さんになって別の集落に行ったので、女川から誰かいないかなあとか当時の村長が探していて、それで話が私のところに来たんです。私も1回は断ったのですが、炭焼きはいつまでも続くわけじゃないなあ、と考え、役場は賃金は安いけれども、行ってみてもいいかなあという感じで役場に入りました。役場に入ったときは日給300円。炭焼きだと、一所懸命やれば1日500円くらいになったのです。出稼ぎすると600円から650円くらいでした。

炭焼きが終わると、カヤシロに行くこともなくなりました。

## 栗の採集

当時谷多丸やたまるだと秋に栗拾いですね。谷多丸では、カヤが生えている場所以外に、いい栗の木の密集地があつたんです。秋になって栗の落ちる時期になると、夜に提灯付けて行くんた。早く行つていい栗を拾うために夜に行つたのさ。皆競争してね。朝4時ころにね。日にちはとくに決まっていなくても、落ちる状況を判断して、明日落ちるなどか、今夜落ちるなどか判断して、みんな競争して早く行つて多く採ろうとしたのさ。栗は誰がどこで採つてもよかつたのです。

### 4 谷多丸

旧北上町の奥山の中にある地名。戦後の一時期、戦後開拓としての入植があつた。本書98ページ以下を参照。

秋には何回も採りに行ったね。9月10日すぎくらいから1ヶ月くらい採れた。

当時なぜそういうふうにも栗拾いに行ったかというね、拾ってきて、石巻方面さ小遣い稼ぎに売りに行くのです。個人の家に一軒一軒回ってね。市場も何もそのころないから、山菜でも何でも、フキでもワラビでも採ってきて、そうやって売ったんです。

栗は、落つたのを拾ってくるのです。栗は口開いてみんな落ちつからね。天候次第だから、今ごろ口開いてぼろつと落ってきたなと思って、提灯付けて行くのです。天気が悪くなって、ああ、明日雨だ、今夜雨だつて。雨降るとなおさら興奮するの。雨降るとその後風吹いて、栗が落ちる。だから興奮して行くのです。

一回にメリケン袋。1袋、1袋半を持って帰りました。手でそのまま集められるくらいたくさんあったのです。女川以外の人も採ってよかったのですが、女川の人が多かった。なぜ女川の人が多かったと言うと、自分は親父が行人前に田んぼを買ったけれど、他の大沼の人たちは、田んぼつていうと大沼という沼だったから、春田植えしても秋に全然穫れない。それでご飯を入れて栗御飯にしたのです。それから、煮てから干して、子どもたちのおやつになったのさ。今みたいに食うもんじゃないだからね。

大沼の田んぼをやっている人たちは、米が穫れないんだから。あるところのおばあさんが、ざるをもつてきて、「今夜の米がないから、貸してくれないか」と来ていた。何回も来ていた。そういう時代だったね。栗は、まず煮て干すんです。たいていは、つるして干すんです。干し柿干すみたいに、糸を通して、つるして干すんです。保存のためにね。干すのが面倒は人は、むしろで干したね。拾ってきた栗を、廊下にむしろさずーつと奥まで敷いて干したのさ。

そのままぶちぶち、落豆(落花生)食うみたいに、食べるのです。今みたいに何もないから、学校から帰ってから、栗をポッケさ入れてね、遊びに行ったのものです。そういう生活でしたね、小さいころは。

##### 5 メリケン袋

小麦粉(メリケン粉)が入った大きな袋。小麦粉を出したあと、さまざま用途に使われることが多かった。

栗拾いしなくなったのは、炭焼きをやめたところかなあ。食料が豊富になつてきたことが原因じゃないかと思ひます。なぜ食料が多くなつてきたかについては、昔は何にも穫れなかつた大沼が米がたくさん穫れるようになったからです。

## 山の変貌

今は山には山菜採りで入るくらいだね。昔たとしよっちゅう入つていたので、山道がはつきりしていたんです。ところが、今は昔みたいに人さ入らないから、その道路が今途切れてしまった。炭背<sup>し</sup>負<sup>よ</sup>つて歩いたころには、かきわけなくても、走ることができたくらいだった。裸で歩いても大丈夫なくらいだったが、今はとてもじゃないけど。それから、入り口にはゴミの不法投棄ね。奥へ行くと今度は沢が荒れてんだね。なぜ荒れているのかというと、人が入らないからだね。小さい沢の変化はすごいなあ、と思ひますね。

## 子供のころの遊びと大沢橋の杉の木

秋になれば、コクワのいっぱいになった上さ上がつてね。ぎつしりなつてゐるからね。毎日学校から帰つて来つと、そこさ行つてね2人3人して採つて食べたんだ。あれ食べると舌裂けるからね。舌が縦に裂けるんですよ。裂けるくらい食べたね。

山ではね、小さい炭の窯を作つてね。大人が炭焼きやつてゐる脇さ行つて、炭焼きの真似です。よそ（のジイさんやオヤジさんが行つてゐるところへ行つてね。できるだけ本物に近づけてね。三人四人（よつたり）でね、こうやれああやれつて、炭焼きの真似してね。小さい窯でもしつかり炭になるからね。

このあたりでは、大沢橋のところに杉があるんだけど、あの杉の木のもとに沢があるし、あそこが遊び場だったのでね。みんな集まってね。相撲もやったし、馬跳びもやった。しかし、あそこが今度道路作るのに買収になってね。このへんの思い出全部、あそこ  
の杉しか残ってないんだけど、なくなっちゃうなあと思ってね。鬼  
ごっこやると、山さ逃げて行ってね。しかし、炭焼きやっていたから、  
こっちから見えた。そんなふうに遊んだね。そんな女川おながわの子供、た  
ちを何十年も眺めてきたんだから。女川のことは何でも知っている  
杉でねえかな。痛ましいね。(この杉は、2006年に伐採された)

構成／宮内泰介



大沢橋の杉の木

たておかえいし  
館岡栄志さん

「最後に炭化するときはもう、

一つ、二つ、三つ…って」



館岡さんは昭和13年（1938）、北上町女川おながわ生まれ。6人兄弟の長男として農業（水田・酪農）のほかに炭焼き、出稼ぎ、と時代の変遷とともに仕事に取り組んできた。昭和38年に結婚、3人のお子さんがいる。山間地域である女川で、館岡さんはヤマの自然のなかで働き、暮らしてきた。

### 契約講けいやくこうの決めごと

契約講はね、今で言うのと、困った人を助ける組織なんだね。藩政時代以来と言われています。たとえば冠婚葬祭とか、家を建てるときだとか、火事になった場合だとか。とくに家は昔はほとんど茅葺きだったからね。縄が必要だった。お互いに縄を持ち寄ることが（契約講で）決められていたんだね。だいたいこの界限はそういうシステムだった。確たることが書いてなくても、決まっていたことがあった。誰かが亡く

なつたときには契約講がもつとも役割分担として重要だった。ルールにはかなり厳しい側面もあったね。一家の主人が何か罪をおかすことがあったら、契約講で評定されて、場合によっては田んぼや仕事か村八分で誰も手伝わない。講長は年功序列で決めてたんだね。年に2回、飲み会があつてね、そこでいろいろな決め事をした。

## 女川の山

この部落は、ヤマだからね。国有林が多いから。生業では製炭業、炭焼きを主にやってきたんだね。兄弟も8、9人あるもんだし、長男だけは仕事を継ぐので残つて、あとは東京なり仙台なりに縁故就職で出ていったんだね。一四一人持ちと、八十一人持ちの山があつた。明治政府のころ、国有林と部落共有の山の区分けがあつて、お触れが回つたんだね。全部自分たちで管理するのは大変だし、私有林だと税金がかかつてしまうからね。貧しい部落ほど国有林が多くなつた。女川には最初81戸住んでたから。八十一人持ちになつたんだね。その後昭和になつてから、一四一人持ちの山というのも加わつたんだね。

## 山分け

国の計画に沿つて集落全体で山の立ち木を払い下げしてもらい、個人に分配することを「山分け」という。山分けのやり方は、毎年国と話し合いをして決めていた。山分けの話し合いに際しては全員が寄つて、実際に山を見てから、どのようにして分けるかについて話し合つた。山分けに関しては役員も設定され、委託林組合の「払い下げ総代組合長」にはかなりの権威があつた。

### 山 1 一四一人持ちの

昭和3年生まれの大内貢さん(女川)によれば、百四十一人と橋浦村所有で女川が管理していたものを昭和11年ごろ払い下げてもらつたものだという。

山分けの具体的な方法は、まず区画ごとに「○○名持ち」というのだけ決めておく。たとえば広葉樹だとだいたい25人くらいで、生産の効率もいいんだね。個人一人ずつに分配するのではなく、だいたいこの区画は何人でというのを決めておく。たとえば道路から近い区画に関しては面積を少なめ、道路から遠く木材の運搬が辛いようなところは面積を大めというふうに。まず大雑把な分け方をして、その後小分けをして、最後に個人同士、くじ引きで自分のところを決めるんだね。山分け、というくらいだから、目方で測ってどうこうではなくて、だいたい目安だね。くじ引きだし、より多く分けられたら運がいいなあと。実際山に入ってみるまで並んで、ナタで木の皮を剥いで、一番二番と木に印をつけていくんだね。十番のところは下の数字を大きく傷つけておく。でないと十一番が二番になってしまうわけさ。

## ヤマガヤ

国有林や部落林からは炭<sup>すす</sup>双<sup>すず</sup>子<sup>こ</sup>に使うヤマガヤ（ススキ）なんかも自由に刈って来れてね。ヤマガヤは萱<sup>か</sup>葺<sup>ぎ</sup>き<sup>き</sup>屋根にも使ってたね。ほれ、北上川のカヤ（ヨシ）はボキッと節で折れて、中に空洞が多くあるんだけど、ヤマガヤちゅうのは空洞が無くて、曲げても柔軟に曲がる。柔軟性があるんだね。ヤマガヤは自由で、刈っちゃいけないというのはなかったね。ただ、個人の山では刈っちゃいかんかった。

## 災害

終戦後くらいだから、ちようど燃料がすごく不足していたころなんだね。一斉伐採がよく行われていた。戦後はずいぶん木を切ったもんだったよ。だからそのころはけっこう禿山なんかもあったんだね。その後

### 2 アイオン台風・

#### カスリン台風

ともに東北地方に大きな被害をもたらした大型台風。1947年9月、カ

続けざまに大きな台風、アイオン・カスリン台風が来たんだけど、えらい被害が出てしまった。山の保水力が失われてしまったんだね。草葺の家が流されてしまったり、大変なものだった。戦後のことだったね。ここ（北上町）は堤防も低いし、河口の割には被害がなかったけどね。

## 女川での炭焼き

女川おながわでの炭焼きは明治前からだったんじゃないかな。砂鉄を製鉄するのがこの炭焼きの原型だったんじゃないかと言われている。明治にはもう製鉄はやらなくなってたみたいだけど。薪は風呂沸かすのに使います。木は雑木、なんでもいいんです。けど炭に焼いたときの良し悪しはあった。固く長く保つ炭もあれば、すぐ灰になる炭もある。一番値段が高いのはナラやクヌギ、あまり良くなかったのはマツやクリやハンノキ、ミズヌキ、山で多いのはナラの木だね。

炭が生計を支えていた。財産といえば他に何も無いから。焼いた炭は売りに出す。石巻や鹿又かまたへ売りに出していた。自分で売りに行ったのではなく、女川にも戦後1人いた業者が集めていた。他の部落に行くと魚や米と交換したりもしていたんだよ。

炭焼きは年中していたんだよ。冬もやってた。冬場の消費が一番最盛期だからね。冬の暮れになると炭の値段が急に上がって、年が明けるともう暴落してしまうんだね。消費は石巻で、ポンポン船ポンポンぶねで、釜かま谷崎やざきあたりにまでとりにくるんだね。ここ（女川）から背負ったり、リヤカーを利用したりしてね、陸路は馬車でね、おらが小さいときはそうだったよ。その前は、昭和10年以前だから覚えはないけれども、平田船で来てたっていうね。ポンポン船で引つ張ってね。

スリン台風が、またその翌年の1948年9月にはアイオン台風が日本列島に接近、東北地方の太平洋側に大雨をもたらした。北上川やその支流も氾濫し、とくに岩手県一関周辺に大きな被害が出た。（気象庁ホームページ「災害をもたらした気象事例」を参照）

### 3 ポンポン船

ディーゼル機関が完全に普及するようになるまでに使われていた旧式エンジンによる船舶（焼玉船）。「ポンポン」という音とともに煙を上げていたことからポンポン船と呼ばれた。

## 炭をつくる

館岡さんをはじめ炭焼きの仕事に従事したのは、中学校を卒業したころだった。父親の作業を見よう見まねで手伝っていたという。自分ひとりで各々の作業をするようになったのは、20歳を過ぎたころだった。館岡さんによれば、「昭和1ヶタ代生まれの人たちは、もつと小さいころから手伝っていたんでないかな」。館岡さんは炭焼き専業ではなく、冬の間の農閑期のみ炭焼きに従事していた。

私は35、36歳のころまで炭を焼いていたんだけども：まず木を切ってきて、原木を3尺ずつの高さにして、そこへ赤土をかけて表面搔いて、叩いて固くして窯にして、火送りで自然に燃やすんだね。だから炭焼くのには昔は10日や2週間かかったっていうね。炭は高温で、それを自然に冷ますから、時間かけてね。窯の大きさは1間半、9尺×10尺くらいだね。土管を煙突にしていたんだよ。煙突だから、それを高くすればするほど煙が強くなって、短いと煙が弱くなるんだね。煙道のつくり方によって炭の善し悪しが決まるんだね。40代、50代は煙で分かるけど、30代はまだ温度計を使って見てなきゃならなかった。ずっとやってる人は窯から離れてても分かるほどで、経



炭焼き  
女川では、現在も炭焼きが行われている。

験と慣れが大事だったんだね。プロはもう、煙を見ればわかるらしい。煙の色とにおい。最初はもう、S  
Lの煙みたいに黒いが、だんだん白くなってきて、一昼夜経つと浅黄色あさぎいろになる。炭化していくのが見てと  
れるんだね、キャリアがあると。最後炭化するときはもう、一つ、二つ、三つ……って、ほんのりと煙らし  
きものが出るだけ。炭焼きの温度は、最初は一生懸命火をくべて、釜全体に火が回つたらくべるのを止め  
る。そのときは、華氏80度なんだね。当時は華氏で計算してた。あとは空気をやらないで乾燥させて、炭  
化させる。そんなときは、華氏360度くらいだったかなあ。

炭焼くのは、4〜5人でやってみました。1人じゃ大変だね。山分けのくじ引きで隣になった人たち同士  
だね。今じゃあもう炭焼きなかなかやってないけれども、当時は焼いている窯があちらこちらにあったの。  
山の中、谷のところね。集積しやすい場所にあった。一度使った窯は、雨の時期に3ヶ月ほど放っておく  
ともう濡れてダメだからね。屋根をかけとけばいいんだが、昔はカヤの屋根で小屋つくってたから、窯が  
濡れちゃうとね。

炭焼きに行くのは家から通いで行ってたね。ただ炭化するときには全部その、見てて、空気の流れをうま  
く遮断せねばならないから、夜に出かけなきゃいけないこともあった。真っ暗だから、若いときは怖くも  
あるね。でも昔から、ほれ、1人で夜に窯を見に行けるようになって、「あの子も一人前になったなあ」つ  
て言われるもんだった。

## 炭で生活する

当時はヤマガヤ刈ってきて、それを縄で編んで炭すみすび双子つくって。炭を焼くのは男の仕事だけど、炭双子  
編むのは女性の仕事で、働いてたんだね。それで目方で量って炭を売ってたね。今で言うところ1俵で15キロ

くらいか…。4貫500が基本だったから。それで、賢い人は：調整してやってたねえ。中の炭の量を少なくしてね。当時のお金にすると、自分の家を建てたのが昭和32年だから、そのとき正職人の、一人前の大工さんで日当が380円。クヌギやナラ、上等な木でなかなか灰にならないんだが、炭も高くて炭<sup>すみ</sup>双<sup>すい</sup>子<sup>こ</sup>1俵400円ほどした。それくらい、昭和32〜33年までは高く売れたんだね。戦時中は米はもちろん炭にも統制がかかっていた、炭が自由販売したのは終戦後だった。炭を冷ますのに4日くらいかけて、それから1週間から10日くらいで、炭双子を30俵くらい売りに出していたね。急いで冷まそうとすると、すぐに灰になってしまうから。それで、酸素もやらないようにしてね。かなりの重労働だったんだよ。30〜40俵ほど炭双子が出るような窯をつくってね、あんまり窯を大きくつくろうとしても、木を揃えるので重労働になってしまうから。それでも1ヶ月で100俵ほどになるからね。それを石巻方面に出してたんだ。当時はかまぼこづくりにも炭が重要だったんだよ。薪も出荷してたね。1束25円から30円くらいだったかなあ。仲買人が5人も6人も来てねえ。

自分たちでは、そんなに炭を使ってなかったかもしれない。生産者は使わないものなのかもね。こたつの火鉢に使ったり、魚を焼くのに七輪で使ったりはあったね。女性はアイロンでも使ってたな。あんまり強くすると服が焦げちゃうんだね。あとは、養蚕をするときの保温かな。こはやませが吹いて春先なんぞ寒いんだよ。戸を立てたり障子を立てたり。蚕が桑を食べなくなっちゃって、手間がかかるからね。

### 炭焼きから出稼ぎへ

炭焼きもね、東京オリピック（昭和39年）のころまでだね、あとはほとんど、今のガスコンロ、石油、化学燃料に押されて、なくなっていくってしまったんだね。昭和40年ごろまで。時代の変遷だよ。うちでも

そのころもうやらなくなつてたな。水田と、片手間に昭和28年からずっと酪農をやっていたね。その後は女川部<sup>おなわ</sup>落は皆して出稼ぎだね。だいたい名古屋あたりに出かけて、黒部ダム<sup>くろべ</sup>4にかかわつたつていう人も多いね。

館岡さん自身も、毎年ではないが名古屋や東京の青山に出稼ぎに赴き、おもに地下鉄工事や下水道工事に従事したという。稲刈りが終わつてから田植えの時期まで、農閑期の半年ほど行つていた。

当時この北上の川向かいあたりは出稼ぎブームでね、みんな行つてたね。大阪万博（昭和45年）あたりもずいぶん行つてたみたいだよ。黒部ダムにも出かけてた。北上から何人かで車で行くんだよ。運転、じゃんけん決めてね。その後昭和45年ごろに減反政策<sup>げんはんせいさく</sup>がとられてからも、よう行きました。今60代、70代になつている人たちだ。そういう時代だったんだね。当時は北上は留守がちでした。女性は出稼ぎには行かなかつただけんど、戦後、朝鮮戦争のときに紡績で女性たちも出かけていったよ。愛知に行つて、そのまま所帯もつて土着した人たちもいた。

## 大沼があつたころ

大沼の周辺では、田んぼをやつてただけどね、「浮き<sup>うき</sup>谷地<sup>やち</sup>」つてね、根っこが深くあるから、大雨が降ると、抜けてそのまま流れてしまう。そのまんま流れてきてしまう。流れるとしばらく浮遊土<sup>ふゆうど</sup>になつちゃう。それは個人持ちじゃなくて、誰のものでもない。（大沼の周辺は）土地はあるけれど、不在地主だつ

### 4 黒部ダム

富山県黒部川に建設された日本最大級の水力発電ダムで、1956年着工、1963年竣工。総工費は当時で513億円であり、日本各地から集まった延べ作業人数は1000万人を超えた。

（黒部ダムオフィシャルサイト「黒部ダムを知る」を参照）

### 5 減反政策

米の在庫が増加の一途をたどつたため、政府は1970年から新規の開田禁止、政府の米買入限度の設定などを盛り込んだ米の生産調整を開始した。

たんだね。当時、三井三菱がやってきて、その一角を支配して持っていたらしいんだね。田んぼはせつかく植えてもダメな年もあったね。戦時中は、自由自在で誰が使っても良いというものがあつたけれども、戦後は農地解放<sup>6</sup>で、全部平等に小作人に分けなさいと。昭和22年のことだね。大沼周辺の田んぼを使つてたのは部落でもごく一部だったね。浮き谷<sup>うきや</sup>地だからね。このあたりまで、ヘソのあたりまで入つて田植えしてましたね。5月に田植えして、うまくすれば秋に収穫<sup>とと</sup>だけど、うまくいかない年も多かった。

沼地の真ん中は水面で、不毛地帯だった。周囲が浮き谷地<sup>うきやち</sup>だね。今はよく川面に群生<sup>ぐんせい</sup>してるヒシがけっこうあつた。ヒシの実を結構食べたね。包丁で真ん中を割いてね、食べたもんだよ。わりと美味しいんだよ。栗みたいな味がしてね。澱粉<sup>でんぷん</sup>が多くて。もうこの彼岸前になると群生してて、よくとれたんだね。今でも皿貝川<sup>はらばながわ</sup>のあたりにはあるね。

## 自然の変化

魚よく捕つてたね。まずはナマズ、それからフナ、終戦後にはヘラブナも出てきたね、スタイルがいいやつ。マブナは腹がぼつてりしていた。あとカヅカ（ハゼ）ね。それから清流に好んで棲む、カヅカの黒いやつだね。俗称「ナベカヅカ」って呼んでおつた。鍋底<sup>なべそこ</sup>のようだね。普通のカヅカよりも小さかった。口も小さいから、釣りをしてて、当たりをちゃんとするのは大変だったね。餌をつつつくだけで。山水が流れ込んでいるような、汽水の上流のほうにいてね。大きな川にはいなかった。当時、昭和30年ごろまでにはたくさんいたの。でも最近ではめつたに見なくなつたね。カヅカは正月の出汁<sup>だし</sup>用に、みんなして、よう捕つたもんだつた。みんな周りの川だね。こころへの小さな川っていうと、大沢（川）があるし、山沿いにもある。小さな川はいっぱいあつた。今は農地を区画整理するために一つに集中させようとするから

### 6 農地解放

1947年、GHQの指導の下、日本政府がおこなつた農地の所有制度の改革。政府が強制的に地主から買い上げ、小作人に売り渡す制度。これにより、日本の農家は基本的に自作農となった。

ね。大沢川には清水、湧き水も多くて、池みたいに溜まっているところを「タナゲ」って呼んでたんだね。昔は女川おんながわのどこにでもあったもんだが、それも昭和28年に水田の区画整理がおこなわれて多くは消えてしまった。

あとは、タニシも食べていた。こちらへんではよう食べて、夕方ごろ家の台所から、ガラガラ音がしたら、ああタニシを洗ってるんだな、今夜タニシなんだろうなってわかったもんだよ。ゲンジボタル：ホタルもたあくさんいたんだよ。家にも入ってくるんだから。自由自在に、出たり入ったりしてたんだよ。大きいのを捕まえてきて放して飛ばしてたもんだつたよ。昭和3年のころまでだねえ。あのころは…。トンボ、イナゴ、ホタル：どれも減少しましたね。増えたのはハクビシン<sup>7</sup>。トマトやカボチャ、キュウリ、トウモロコシをいたずらするもんでね。見た目は鼻筋もおつてきれいなもんだけど、ここ数年で急に増えてきたね。

昭和30年後半ごろは、食糧増産食糧増産ちゅうて、でもまだ農業は使つてなかつたんだけどね、そのうち入ってきて、そのために自然がうんと破壊されてしまったんだね。農業が普及してしまつて。

皿貝川さらひがわなんかも、昔は水がびしと張つてたもんだつたけど、今は温暖化でよう凍らなくなつた。水が張つてたときは、その上を歩いて学校行き帰りしてたもんだつたよ。「危ない」つて言われたりするんだが、氷もだんだん薄くなつてきて。昔からすると、今はもう温暖化しているつていうのがよくわかりますよ。50年後はどうなるのだろうか。

構成／黒田暁

#### 7 ハクビシン

ネコ目ジャコウネコ科に属する夜行性の動物。Paguma *lavata*。植物食中心の雑食性で、とくに果実を好むことから、深刻な農業被害をもたらすことがある。日本の固有種か外来種かはつきりしていない。

たけやまたけし  
武山武志さん

「谷多丸開拓で13年間山にいました」  
やたまる



大正12年（1923）、本地部<sup>ほんち</sup>落<sup>おち</sup>に生まれる。昭和19年（1944）から軍役、昭和21年復員。昭和23年から昭和36年の間、谷多丸開拓。その後、北上町役場で農業関係を中心に従事。女川在住。

中国で敗戦を迎える

徴兵前は、東京の三菱造船所で徴用工として働いていました。鋳物の型を作っていました。そこで徴兵されて軍隊に入り、中国へ行きました。

当時は状況が悪くてね、上海の呉淞<sup>ウイソウ</sup>という町に1ヶ月くらい駐留<sup>ちゅうりゅう</sup>したんです。その港から船で出て、なるべく沖に出ないように（潜水艦攻撃を受けないように）沿岸<sup>えんぎん</sup>をたどって行って、汕頭<sup>シヤントウ</sup>に上陸して、その辺の警備を1ヶ月くらいしました。そして陸づたいに広東に向かい強行軍移動。広東から少し奥地の大王角<sup>だいおうかく</sup>というところで終戦になったんです。そのころ、状況が悪くてベトナムから退却<sup>たいせつ</sup>してくる部隊があっ

たのですが、それについてくる敵があり、その部隊を援護して助けるというのをやっていました。

敗戦で武装解除されて、捕虜として、珠江しゅうこうという川の災害復旧工事を手伝わされました。堤防が決壊したところなどで働いたんです。手伝うと早く日本へ帰すというものだからね。

食べ物は配給がありましたね。1日コップ半分くらいの米が食べられました。暖かい、地味のよいところなので、「山東菜」というやつが、種をまくと順調に収穫できて、それを米に混ぜて食べました。あと、パイヤをおしんこ代わりに漬けてね。トウガ（トウガン）もありました。

そのうち私は肺炎をおこしてね。野戦病院で療養しているうちに、帰還命令が出たから、無理して帰ってきたんですよ。みんなといっしょに帰りたいからね。事故退院ということ。

## 開拓へ

昭和21年の4月に復員してきました。

復員してきてから、農地改革の実施末端機関であった村の農地委員会に専任書記として勤めました。戦争に行く前に村の産業組合の仕事をしていたので、帰ってきたら、「待ってました」という感じだね。農地委員会では、農地解放に従事してね、自作農創設の業務に専念しておりました。

その農地解放が幸いに順調に行ったから、こんどは県から開拓割当というのが各町村に来たんです。

ここは旧橋浦村はしうらの36町歩（36ヘクタール）の割当だったのです。それで、各部落の山の頂いただきで開墾可能などころは6町歩ほどやったのですが、残り「30町歩」がどうにもならなくてね。そこで最後に目をつけたのが谷多丸地区やたまるだったのです。村人にさえあまり知られていない荒野でした。ここで残る30町歩を開拓しようと、計画を立案したのです。

「戦後開拓」の一環としての谷多丸開拓

谷多丸の開拓は、日本全体の「戦後開拓」政策の一環である。終戦後、食糧難対策と失業者・戦災者・復員兵対策とを兼ねて、開拓事業が打ち出された。昭和

国の命令だったのです。その第一線に出たわけです。あまりに真面目だったのです。自分で開発計画を立てたからね、自分で行かなければ、ということになって。

当時は開拓地の設定基準条件があったのです。谷多丸地区開拓は30町歩（30ヘクタール）未満というので、純粹入植、補助開拓地ということに認可されたんです。補助開拓地というのは、国営とか県営の開拓地と違って、規模が小さくてね、開発行為はすべて自分たちの考えで計画しなければなりません。それを県に申請して、計画の認定を受けて事業を実施するのです。そこで初めて補助金が交付されることになります。

もちろんそれは県の開拓営農指導員がおりまして、指導をしてくれました。ひのまもろ日野守さんという方でした。当初は県からの補助金が主なる生活資金でしたが、皆さん軍隊出身者ですので、何とか生活ができたようでした。戦地での最低生活に馴れてきた人たちばかりの集団ですからね。

## 開拓の様子

昭和23年、5人で入植しました。

開墾予定場所の大部分は昔からのカヤ（萱）刈場でね、若い雑木林と、ところどころにアカマツがあって、その根元ではカヤやササが地表を被っているというような場所です。それを鋤で一鍬つつ耕起したのです。年間の開墾目標が50アールでしたが、肉体労働としては過酷でした。そこでまず、焼畑農法を基本としたのです。木を伐り、下草を刈り払って1週間くらい乾燥させるのです。谷多丸はもともとカヤ刈場のところが多くてね、それほど大きな木を倒す必要はありませんでした。そして、気象状況を見て、2メートル幅くらいの防火線をめぐらせるのです。同志の応援を借りて火入れをするのですが、最初の着火地点

20年（1945）11月9日に「緊急開拓事業実施要項」が閣議決定され、昭和22年10月24日に「開拓事業実施要領」が農林省にて省議決定され、計画が進められることになった。開拓事業は全国で進められ、宮城県でも、累計6133戸がこの開拓事業に参加した（途中離農を含む）。（『宮城県戦後開拓史』ぎょうせい、1990年）

の選定が重要です。風を迎えて風下の一番危険な所から火を放つと、火は自然に風に向かって静かに燃えていくものなんです。次は飛び火だけを見ていれば、小気味よく焼き払われていくのです。

火が鎮まったあと、雨を待つてソバの種を撒いてね、表土を浅く切り立てるだけです。ソバが急成長して雑草が押さえられるのです。火入れはお互に儀式のようなものでね、その晩は皆で寄り合つてご祝儀の宴を張つてね、大いに賑わつたものです。

誰がどこの土地をもつかは、合議の上で、「くじ引き」で決めました。私は、急勾配の沢のところに当たつたんです。急勾配のところで、平地が足りませんでした。面積はあるんだけど、地形が複雑なので、まとまった大きな畑をすることはできませんでした。

そこで2反だけ集中して耕種経営<sup>1</sup>をしました。あとは複合経営です。耕種、養蚕、畜産、林業と私は4部門に分けて採算をとつたのです。林業は、炭焼き、他に杉苗・松苗を植えたりね。苗木を販売したのです。

耕種では、サトイモの種芋を作りました。これはよかつたよね。毎年1反作りました。1貫目(3・75キログラム)250円と言われましたからね。そのころの金としてはえらい金でした。これだけを豆やイモでとるのはとてもじゃないが難しかったです。労力と換金というものをよく考えないといけないのです。サトイモは種の貯蔵が難しい。その弱点をつかんでやつたから、おもしろいような収入になりました。土質が、サトイモの栽培に適したのです。サトイモは開拓の最後の方でやりました。

## 牛乳と風力発電

酪農もやりました。乳牛を1頭飼つてね。繁殖を始めた。

### 1 耕種経営

耕種とは、田畑を耕し、作物を植えること。畜産や林業などと区別して言われる。耕種経営とは、耕種を軸にして経営すること。

搾乳さくじゆうした牛乳の運送は、最初2年間くらいは牛乳缶を自転車で運びました。しかしそれでは疲れるというので、オートバイを買いましたね。オートバイだとぼして行つてすぐ帰つてこれますからね。帰つてきてまだ仕事ができるのです。当時オートバイはまだ珍しいころでした。

水戸部部落みとべ（奥さんの出身地近く）の集荷場がありましたね、そこに毎日持っていきました。晩にしぼったものを、水で冷やしておいて、朝持っていっただのです。

谷多丸やたまるは電気がなくてね。子どもたちは電気がないと劣等意識を持っていたのです。そこで、北海道の根釧原野あたりで作った風力発電が、青森の下北パイロットファームで内地で初めてあつてね、そこを日野さんが見に行つて、これがいいということで行けることにしました。やぐら作つてね、大きなプロペラで、ダイナモで発電しました。谷多丸に風力電気が入った、というのが新聞記事になりました。それでつぎつぎに見学に来たのです。風の多い日の余剰電力は、バッテリーに蓄電し無風に備えています。それから、植林した杉が大きくなってくると、風の向きが変わつてきてね。今でもやぐらは山の中に残っていますよ。



風力発電のやぐら

## 「嫁に来たとき、どこに畑があるのかと思った」

武山武志さんの奥さんの絹子さん（昭和6年生まれ。平成18年没）は、谷多丸開拓のときに、嫁に来た。昭和25年、戸倉村（現宮城県南三陸町）からだった。

私、嫁に来たとき、どこに畑があるのかと思ったもの。畑らしきものはたった一面しかなかったもの。山の木を切って焼いて、刈り払って、そして一鍬一鍬おこして、畑にした。魚だのそういうのは一切なんだから。子どもたちも、山のクワノミとかノイチゴをとって食べたもん。何でも自給自足だから。

子どもたちは昼間は夢中になって野山駆け回って、お腹すかしてね。しかし、当時養蚕をやっていて、養蚕というのほとても忙しいのね。御飯食いたいんだけど、御飯食わせられないのね。もうごろごろ寝てしまうのね。かわいそうだな、と思って。それでも子どもは育つの。

おやつと言えば、栗の乾燥したやつとかね、ほしいも、それとか、あと、野山に生えているイチゴとかクワノミとか、そんなのしかないんだから。

小学校にやるために子どもは里の実家に預けていたんだけど、日曜日になると、「今来たよ」と帰ってきてね。下にいたらもっとおいしいものとか食べられるんだけど、「山さ来たなら何もないから、下にいたい？」って聞くと「オラなんか何にもなくてもいいから、父ちゃん母ちゃんのそばにいたほうがいい」って。



武山絹子さん

## 日野守さん

県とは、大方は日野守さんひのまもるを通じてかけあつてもらいました。日野さんは石巻管内の開拓営業指導員<sup>2</sup>で県の職員でした。

日野さんは、石巻に住宅を建てて、そこから通つていたのですが、突然心臓麻痺で倒れて亡くなったのです。離農して下がつてきてからすぐくらいでした。息子さんが高校へ行く前でした。そこでみんながあの人はお世話になった、と、息子さんの奨学資金をみんな募金したことがありました。

## 離農

——離農の話は突然出てきたんですか？

離農の話は、だんだんにね。とくに、学校問題をどうしようかなと思つてね。それがいちばんの問題でした。2番目の子どもまで実家に預けていたんですけれど、子どもたちにとつても精神的な負担が大きくてね。そんなことでいつも日野さんに相談していたんです。谷多丸やたまるの人たちも、子どもとかあちゃん置いて出稼ぎするようになったんです。私は出稼ぎしませんでしたけれど。日野さん、この状態は無理だから、とくに通学問題があるから、と日野さんに相談していたのです。

そのころ、農林省が、経済発展したんだから、国の政策としても、この人たちは任務は果たしたんだ、成長した時代に山の中にとじこめておくのはいかにも国の責任も感じるということから、全戸一斉離農対策事業が農林省の政策で出ましてね、それに乗つて、離農して下りてきたのです。昭和35年3月です。

谷多丸から下りた人は、一人は北海道の室蘭へ行きました。いちばん最後の昭和37年まで一軒残つてい

<sup>2</sup> 開拓営業指導員  
戦後開拓者に助言・  
指導を行う役人。

た人は、現在多賀城にいます。

## 自然の変化

——山の様子は変わりましたか？

谷多丸ではね、魚も最初のうちは、すぐ前の川でヤマメなんか釣れた。

それが、開拓に入って7・8年ころから、杉林にかわりはじめ、水が涸れてきたのです。保水力がなくなってきたんですね。ブナや雑木は保水力がいいのです。

その体験がね、下りてきて、北上町で水道の事業をやるときに、ヒントになりました。水というものはどういうものかを谷多丸で学んだのです。私は、ここに水道をいちばん最初にもってきたのですが、そのときに谷多丸の経験が大いに活きました。みんな山からの沢の水をもってきたので、北上川の水なんか要らない、という声が大部分だったのです（水道計画は北上川から引くという計画だった）。その人たちを加入させないと水道事業は進んでいけません。そのときに、「あんたがた、今はいいよ、しかし今から5年後か10年後には涸れてしまうよ」と論が立てられたのです。谷多丸では、カヤや雑木の時水がこんこんと流れていて、魚も上ってきてね、杉を植えてから、ちょうど下りるころになると、水が少なくなつて、魚もぜんぜんとれなくなつたのです。杉が水を吸うからね。それを部落の会議でこんこんと説明したら、おおそうなのか、ということになったのです。

## 開拓の経験

13年間山にいました。まあみんなを引っ張って上がっていったからね、これは、直ちに降参はできないなと考えました。

谷多丸やたまるの開拓は失敗ではなかったと思います。私は実家から金銭の援助はしてもらっていません。谷多丸で炭や養蚕、酪農、苗木栽培をして、それでお金を貯め、今の宅地を買い、家を建てたのです。

離農後は元の役場に戻ったんだけど、戻ったときには全くの新人でね。しかし、当時農村振興・農村復興という時期ですから、開拓の体験というのは大いに生きました。酪農振興、農業構造改善<sup>3</sup>は、開拓で実践してきたことをやるんでしたから。今考えてみると、給料は安いんだけど、いろんな画期的な新しい仕事をやったと思います。

副業として酪農もやりました。酪農の収入が、役場の給料を上回るくらいだった。それも開拓でつちかわれた信念でしたね。

開拓から下がってきて、ここに家を建てて、すぐ子ども4人が学校ですよ。高校へやって、当時、大学や専門学校へもやって、それだけあらんかぎり力をふりしぼったということですね。実家が農家だからね、父親に開拓はダメだと言われたのを無理して上がっていったもんだから。自分でどれだけできるか、自分を試すんだ、といったものだったからね。

それにしても黙って従ってきた、今は亡き妻の協力があればこそと偲ばれる。

今年7月2日は絹子の百ヶ日忌でした。真新しい墓碑が建ち、法名碑に刻まれた回向の句が子孫のために躡るだろう。

3 農業構造改善  
農業基本法  
(1961年)に基づいて行われている  
事業。土地整備事業  
や経営の規模化、機  
械化などで、主に農  
家に対する補助金や  
融資によって行われ  
てきた。

回向

風風ぎし夕べ子連れの鳥帰る 耕児  
添ひ遂げし骸や夜半の涅槃西風 武志

構成／宮内泰介

## あとがき

私たちが、宮城県旧北上町（現石巻市）を初めて訪れたのは2004年2月でした。北海道大学大学院文学研究科で環境社会学を学ぶ私たちは、北上川河口地域でのヨシ（葦）の利用に注目し、そのことを学びたい、と旧北上町を訪れました。以来、現在に至るまで、毎年2回ずつこの地を訪れ、聞き取りや資料収集に努めました。地域社会と自然環境とのかかわりに関心がある私たちは、調べていくうちに、ヨシに限らず、漁業、炭焼き、遊び、などなど自然との多様なかかわりがこの地域にあることを知り、さらに関心を深めたのでした。

歴史というものは残酷なもので、記録しないと、なかつたものとされてしまいます。私たちは、私たちが聞いた地域の貴重な歴史を、なんとか残したいと考えました。もちろん私たちの調査は不十分なもので、ちゃんと残すほどの水準には達していませんが、それでも、残すことに意義があると考えました。個人が経験したことこそ、地域の貴重な財産だと考えるからです。この何年間か、地域の皆様にたいへんお世話になった恩返しを、少しでもできないかという思いもありました。

私たちが作ったこの冊子は、実にさまざまな方のご協力を得てできました。熊谷貞好様、熊谷秋雄様、千葉五郎様には、熊谷産業の皆様、千葉家の皆様とともに、いつも私たちの調査をサポートしていただきました。そして、この冊子に登場いただいたみなさまには、何度も繰り返し貴重な時間をとっていただき、さまざまなお話をしていただきました。私たちがこの冊子でまとめられたのは、実はその一部にすぎません。その他にも、多くのみなさんのお話をうかがっており（合計33名、延べ67回）、その一部はこの冊子にも生かされておりますが、まだ生かされていない部分がたくさんあります。それらは今後またいろいろな形で発表していきたいと考えています。お名前を逐一挙げることは控えさせていただきますが、

お話を聞かせていただいたすべての皆様に感謝申し上げます。

また、この冊子を作るに当たっては、『北上町史』を手がけられた今野照夫さん（現石巻市北上保健センター所長）に、たいへん詳しい校閲をしていただき、私たちの思い違いや不十分な点を多々正していただきました。さらに、武山文衛さん（現石巻市教育委員会北上事務所長）には、この冊子の配布について、多大なご協力をたまりました。追分温泉の皆様には、すばらしい料理とともに、いつも私たちの滞在を心地よいものにしていただきました。また、菊池永さんには、貴重な写真をこの冊子に使うことをご快諾いただきました。

皆様に、深く感謝いたします。

なお、これまで継続的に調査にかかわったのは、以下のメンバーです（肩書きは現在）。

宮内泰介（北海道大学大学院文学研究科 准教授）

金菱清（東北学院大学教養学部 准教授）

黒田暁（北海道大学大学院文学研究科 博士課程在籍）

平川全機（北海道大学大学院文学研究科 博士課程在籍）

武中桂（北海道大学大学院文学研究科 博士課程在籍）

細川貴志（北海道大学大学院文学研究科 博士課程在籍）

これに加え、細谷恵佑（北海道大学大学院文学研究科修士課程2007年修了）、矢澤和河（北海道大学大学院文学研究科修士課程）、寺林暁良（北海



道道大学大学院文学研究科修士課程）らが一時的に調査に参加しました。

この冊子は、まず分担してそれぞれのパートを作成し、相互にチェックしあい、さらにそれをご本人の皆様にごチェックしていただきました。もちろん最終的な責任は私たちの側にあります。各パートの末尾に、それぞれを主に担当した者の名前を記しましたが、多くは、私たち全員による合作です。

この冊子が、地域のみなさまに受け入れられ、読み物として、また教材として使われれば、これにまさる喜びはありません。また、他の地域のみなさん、あるいは研究者や教員のみなさんなどにも、この冊子がお役に立てばと思います。

北海道大学大学院文学研究科 准教授 宮内泰介

文・構成・写真／金菱清

黒田暁

武中桂

平川全機

細川貴志

宮内泰介

写真提供／菊池永（表紙、p.1、p.9 中、p.47 中）

本文デザイン・DTP／平川全機

北海道大学大学院文学研究科 宮内泰介研究室編

**聞き書き 北上川河口地域の人と暮らし——宮城県石巻市北上町に生きる**

---

2007 年 9 月 1 日

発行者 北海道大学大学院文学研究科 宮内泰介研究室

〒 060-0810 北海道札幌市北区北 10 条西 7 丁目

電話 011-706-4150

[miyauchi@let.hokudai.ac.jp](mailto:miyauchi@let.hokudai.ac.jp)

<http://miya.let.hokudai.ac.jp/>